

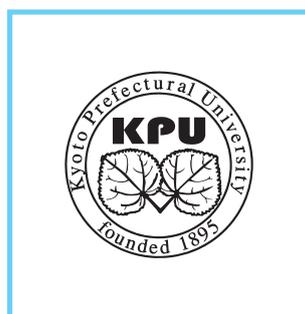
京都三大学教養教育共同化事業

令和3年度 報告書

時代が求める新たな教養教育



京都工芸繊維大学



京都府立大学



京都府立医科大学

京都三大学教養教育研究・推進機構

目次

京都三大学教養教育共同化による「新しい時代の要請に応じた教養教育」の実践……………	2
---	---

ごあいさつ

京都府立大学	学長・副学長あいさつ、大学紹介……………	3
京都工芸繊維大学	学長・副学長あいさつ、大学紹介……………	4
京都府立医科大学	学長・副学長あいさつ、大学紹介……………	5

第1部 教養教育共同化の展開

(1) 令和3年度取組の到達点(機構運営委員長 総括コメント)……………	6
(2) 教育IRセンターからの総合報告ー2021年度(令和3年度)ー……………	7
(3) 令和3年度のリベラルアーツセンターの活動を総括して……………	11
(4) 令和3年度三大学教養教育共同化の取組……………	13

第2部 共同化科目の授業研究

(1) 常態化する緊急事態におけるゼミナール教育 (科目名:現代社会に学ぶ問う力・書く力((リベラルアーツ・ゼミナール))……………	18
(2) 「モノ」に関わるゼミナールにおけるオンライン授業の難しさと克服策 (科目名:製品の機能から科学を学ぶ(リベラルアーツ・ゼミナール))……………	24
(3) 「レーザーで測る、創る、楽しむ」2021年度報告……………	28
(4) 三大学教養教育共同化へのこれまでの関わり:その2(科目名:生物学的人間学ほか)……………	30
(5) 三大学共同化科目「現代京都論」を担当して……………	32
(6) これまでの、そしてコロナ禍を受けた授業の様子 (科目名:フランス語圏の文化とジャポニスム)……………	34
(7) 読み比べであれ聞き比べであれ(科目名:文芸創作論)……………	37

資料編

(1) 会議の審議状況……………	39
(2) 京都三大学教養教育研究・推進機構 授業アンケート……………	41

京都三大学 教養教育共同化による 「新しい時代の要請に応じた教養教育」の実践

背景

地球環境の危機や一地域の変化が全世界の人々に影響を与えるほどのグローバル化の進展により、社会全体の枠組みが大きくかつ急激に変化している。

現在、新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大によって、多くの尊い命が奪われ、生活や産業、経済関係にも深刻な打撃を受けるなど、私たちは今、未曾有の危機に直面している。長期にわたるコロナ対策の継続や経済の行き詰まりは、グローバル化最優先の個人や組織の社会的存在形式だけでなく、対人コミュニケーションや家族関係など個人の生存の在り方まで、その本質の見直しを迫ったといえる。

これらを踏まえて、ポストコロナ社会をどのように築いていくべきか、世界レベルで人間の叡智を結集した検討と取組が必要な状況となっている。

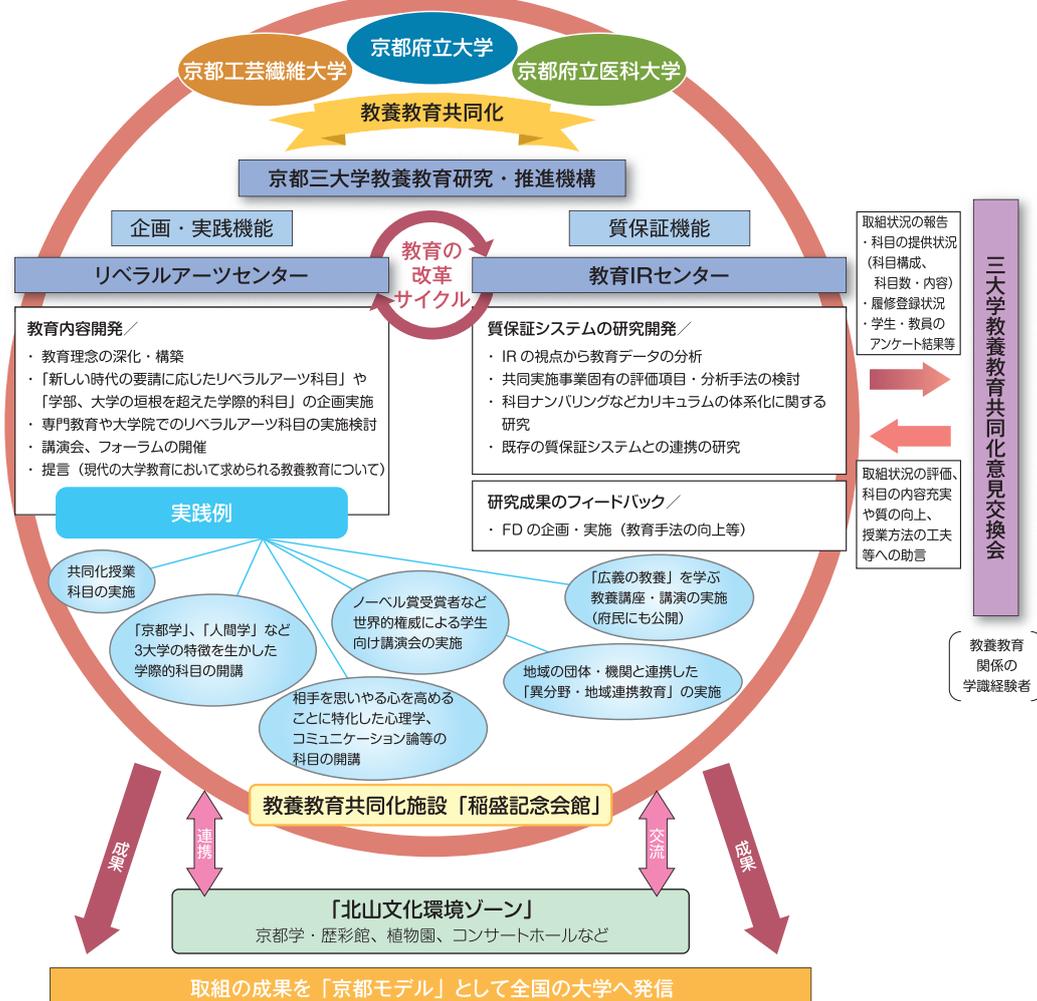
取組コンセプト

国公立三大学の教養教育カリキュラムを「共同化」し、それぞれの大学の特徴・強みを生かした質の高い、「新しい時代の要請に応じた教養教育」を実施する。

人材養成の目標

次の①～③を備えた人材を養成する。

- ①異なる価値観や視点を持つ他者と協働する力としてのコミュニケーション能力及び相手を思いやる心
- ②自ら問題を発見し、それにコミットするとともに、「正解」の存在しない問題についても、学際的な視点に立ち、多様な見解を持つ他者との対話を通して自身の考えを深め、解決に向かって行動する能力
- ③グローバルな局面で、文化や言語を異にする他者と交流し協働する能力





京都府立大学

京都府立大学は、1895（明治28年）年に創立された京都府簡易農学校に源を発する創立120年以上の歴史を有する大学です。人文・社会・自然の諸分野にまたがる3学部・3研究科を備えた総合大学であり、教員・学生相互の密度の高いコミュニケーションをベースに、実験、実習、フィールドワークなど質の高い教育を実現しています。

平成26年度からは、全国初となる京都府立医科大学、京都工芸繊維大学との教養教育共同化がスタートし、教養教育共同化施設「稲盛記念会館」で三大学の学生が一堂に会して学ぶとともに、府民の皆様等との多様な交流が一層促進されています。

また、現在、国際的な注目を集めユネスコ無形文化遺産にも登録された和食文化の保護・継承・発展を目指す和食文化学科や京都府の知の拠点として、高度かつ地域社会と密接に連携した研究を始めとするリエゾン機能強化による産学連携の推進、地域未来を共に創るための拠点組織の設置など特色ある研究・教育を展開しています。



学長あいさつ

京都府立大学学長

塚本 康浩



対面と音声と映像の講義

またしても、本年度もCOVI-19の影響で対面を中心としたオンラインとハイブリッドまたはオンデマンドの講義となりました。私は2020年4月から京都府立大学の学長をさせていただいておりますが、引き続き「生命科学講話」を担当いたしました。かなりの数の受講登録がありましたので、全てオンデマンドの講義としました。みなさんはパソコンで受講されたのでしょうか？それともスマートフォンでしょうか？受講場所も自宅とは限りませんよね。出来るだけ文字を大きく、文章量も少なめにし、代わりに動画を多くしました。もしかしたら、パジャマのままでネコと一緒に見ていたかも知れませんね。今後は、Withコロナ、ポストコロナの状態でも今年のようなハイブリッドやオンデマンドという形式の講義は有意義なものとなるでしょう。先生方も良い講義のための資料作りに励んでおられます。時間にとらわれず、理解度の高い、そして無茶苦茶面白い講義が三大学連携により創出されることを期待しております。夏場の動画作成は蝉の声がうるさくて難儀します。カラスも意外と騒がしいものです。

副学長あいさつ

京都府立大学副学長
京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員長

川勝 健志

新型コロナウイルス感染症のパンデミックに揺れ、不透明さが増す世界の中で、私たちが進むべき道を選択するには手がかりが必要です。現代の教養教育に今求められているのは、まさにその手がかりとなる専門分野を超えた幅広い教養を深め、目まぐるしく変わる世界の動きにも視野を広げていく。そんな学びではないでしょうか。

生き方の選択肢が広がっている中で、自分自身で責任を持ち、人生をどう生き抜くのか。技術者としてスキルを磨き上げたいのか。専門家や活動家として社会に貢献したいのか。家族と過ごす時間を大切にしながら働きたいのか。人生の手綱を自ら握るためには、「一生、学び続けられる力」を身に着けることが欠かせません。そうした力を身に着けてもらう機会を提供することこそが、大学における教養教育の役割であるように思います。

社会に出ると、世代や育った環境も違う人同士が集まって時間を共有することになりますので、時として他人との間で考えや意見の対立が生じます。しかし、世の中には自分とは異なる多様な考え方や価値観をもった人がいることを受け入れると、世の中全体を肯定できる気持ちの余裕が生まれ、生きやすくなるように思います。異なる考え方や価値観に触れることを楽しむ力と、意見の対立が生じた時に何度でも話し合える粘り強さを身に着けることも、「一生、学び続ける」ためにとっても大切なことです。

三大学教養教育共同化は、リベラルアーツゼミに代表されるグループ活動にも実績があります。そこに仲間と一緒に大学の枠を超えて社会の課題と解決策を考えるチャンスもあります。学生の皆さんには、専攻分野だけでなく、現代社会が直面している諸課題にも目を向けて、社会の豊かさを実現する新たな処方箋づくりに挑戦してほしいと思っています。



京都工芸繊維大学

KYOTO INSTITUTE OF TECHNOLOGY、京都工芸繊維大学は、1902年に設立された京都高等工藝学校及び1899年に設立された京都蚕業講習所に端を発し、1949年に新制大学として発足しました。以来、120余年にわたり日本の産業、社会、文化に貢献する人材を輩出してきました。歴史文化都市である京都は、1200年を超える「みやこ」として、常に新しい「もの」を創出し、革新的な技術を生み出し、磨きをかけ、国内外の信用を得てきました。この創造的挑戦心を育ててきた京都という場のもつ力を、工学科学（人に優しい工学、科学の展開）の研究・教育に活かし実践する、これこそが本学のミッションであり、「京都思考（KYOTO Thinking）」と呼ぶものです。



学長あいさつ

京都工芸繊維大学学長

森迫 清貴



工科系大学である本学は、TECH LEADER（テック・リーダー）と呼ばれる社会・産業イノベーションを牽引できる能力を有する「ひと」を育てることを人材育成の目標としています。TECH LEADERは、本学の造語ですが、次の4つの工芸コンピテンシーを修得し、知識だけでなくスキル、行動も含んだ強みを有するひとのことを指します。

一つ目は言うまでもなく「工科系専門力」です。二つ目は様々な課題を解決に導くことのできる「リーダーシップ」です。これは協働する仲間の中で自己の役割を把握し、チームの目標の実現に向けて推進していく能力です。三つ目は「外国語運用能力」です。日本社会も産業もグローバル化を意識せずに活動することはできません。四つ目が「個の確立」です。個の確立は、これまで掲げていた「文化的アイデンティティ」をより目標を明確にしたものであり、「自他の文化を理解し、多様化する社会の中で揺るがない個を養成する」という意を表します。自己を認め、他者を認めて心豊かに暮らしていくには、深い思考を背景に、互いに拠って立つ文化を理解し、共有することが必要です。そのためには自己のアイデンティティとなる基盤形成が重要です。専門分野の異なる学生が集うこの場は、必ずその役に立つと思えます。三大学共同で提供される教養授業科目は、「個の確立」の形成のみに役立つのではなく、4つのコンピテンシーすべてに関係しています。TECH LEADERのベースとなる主体的・科学的に考え行動する思考力・判断力・倫理性などを育むために必要なものです。

令和2年度からは、COVID-19のためやむなくオンライン授業が始まり、三大学の学生が集う

機会が十分に持てない状況になりました。授業評価アンケートや実施状況報告から、受講生、教員それぞれの苦勞も伝わってきましたが、その一方で授業方法として新たな可能性も感じられました。それらを今後に活かし、より実りのあるものとするのが求められています。

副学長あいさつ

京都工芸繊維大学理事・副学長
京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員

吉本 昌広

本学の人材育成の目標であるTECH LEADERを育成するために、学部の工学教育には3つ側面があります。まず、「数学、物理、化学や基礎的な専門科目などの基盤的な工学教育」です。これは時代が変化しても不変、あるいは、人の一生を超えるようなゆっくりとした時間で変化する工学教育です。次は、「AIなど時代の波に対応する教育」で、十年二十年といった時間単位の変化にタイムリーに対応した工学教育です。三つ目は、「デザイン思考、リーダーシップや教養教育などまだ見ぬ新たな科学技術の展開に対応した工学教育」です。まだ見ぬ世界を語り構想するには、工学や技術に留まっているわけにはいきません。人や社会を知り、人と共感して次に向かうために、原動力や方法論が要ります。教養教育をはじめとする、まだ見ぬ世界に対応するための工学教育を今後、強力に進める必要があります。

コロナ禍は、自ら問いを立て仲間とともにその解を探す営みをする場としての大学に大打撃を与えました。対面授業や課外活動などに対する大きな制限は、仲間と過ごすことすら出来なくしてしまいました。一方で、オンラインでできることも明らかになってきました。学生が自らの専門分野を離れて、自ら問いを立て仲間とともにその解を探す営みの場として、三大学教養教育共同化事業は最適の場所です。新しく得た手段であるオンラインも活用しながら、本事業の発展と深化に微力を尽くして参りたいと思えます。



京都府立医科大学

京都府立医科大学は、1872（明治5）年に開設された京都療病院における医学教育を始まりとする我が国で最も古い医科大学の一つで、今年（2022年）は大学創立150周年を迎えます。

本学では、歴史と実績によって培われた医学・医療技術と高い倫理観を身につけ、患者に寄り添った医療を考える優れた医療人を養成しています。また、多様な学際的研究活動を推進し、次代をリードする指導的人材を育成しています。

本学は、京都府民に開かれた公立大学として、地域医療への理解と使命感を持った医療人を育成・確保するとともに、大学の理念「世界トップレベルの医学を地域へ」のもと、最先端の研究を治療に活かす取組や、感染症対策・健康増進への寄与など、大学の成果を府民に還元するよう努めています。



学長あいさつ

京都府立医科大学学長

竹中 洋



「教養教育とは何ぞや」、令和3年度に京都府立医科大学ではそのことについて、教育センターや教授会で意見交換に努めました。我々は医学部に入学した未来の医師や看護師、研究者ができるだけ多くの人に触れ、人間社会をrealに体験することや医療系と異なる学問体系を学ぶ必要があると考えています。一方で、それが何十年も固定されたものであるとも考えていません。教育は未来のためにあるべきもので、学修者が参加することも必要です。

科目的には一般教養があると同時に、専門教養として諸科学を学ぶことは必要であり、それは必ずしも教員の専門性に依るものでもありません。場合によれば教員の人格そのものが教養となることは否定しませんが、要は非専門性との出会いと異なる学問の理解が必要であるということです。又、時空間の共有もとても大切で、多様な人間の理解にも役立ちます。

その点では各大学の教育責任者である学長会議が機構内に設定されたことは重要で、京都三大学教養教育研究・推進機構の「研究」が何であるか皆で考えることが始まると思います。

副学長あいさつ

京都府立医科大学副学長
京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員

橋本 直哉

三大学教養教育共同化事業は、文部科学省の支援を得て平成26年度に開始された教育プログラムに端を発するものですが、平成29年度からは京都工芸繊維大学、京都府立大学及び本学の独自共同予算による運営となって、少しずつ形式を整えながら、全国に先駆ける大学間連携のモデル事業として、高い評価を受けつつ展開してきたものです。

一般に専門性の高い単科大学では、所属する学生は専門領域の殻の中に閉じこもりがちですが、本学は、この三大学教養教育共同化事業によって、学生は三大学それぞれの特長ある教養講義科目を幅広く選択・受講できるだけでなく、リベラルアーツゼミナール科目の受講等を通じ、専攻科目や学修目標の異なるさまざまな学生たちと交流することができるという大きなアドバンテージを得ることになりました。学生諸君には、こうした機会を最大限に活用して、積極的に交流することで豊かな人間性を築き、みずからの興味に合う幅広い教養を身につけ、大きく成長していただきたいと思います。

過去2年間は新型コロナウイルス感染症の蔓延によって国内外が未曾有の危機に直面する中、三大学がお互いの力を合わせて課題授業や遠隔授業などを組み合わせることによって、この学びのかたちを維持してきました。本年度も、状況によりますが、安全面と学習効果の両者を勘案し、しっかり対策することによって共同化授業を展開していきたいと考えます。学生諸君の積極的な参加を期待します。

(1) これまでの歩みと今後の課題 (機構運営委員長 総括コメント)

京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員長／京都府立大学 副学長
川勝 健志

京都三大学教養教育共同化（以下、三大学共同化）は、全国初の試みとして発足して以来、学生の科目選択の大幅な拡充によって、科目履修者数に加えて、交流率（科目提供大学以外の大学に所属する履修者数／全履修者数）や履修率（履修者数／科目定員）が年々増加するなど、着実にその成果を挙げてきた。しかし、発足から7年が経過した今日、カリキュラムやプログラムのデザイン等を見直す時期に来ているように思われる。そうした課題の抽出・論点整理を行う機関として、今年度10月に三大学学長会議直轄のワーキンググループが設置されたのも、そのためであろう。

三大学共同化の課題については、2019年3月に外部の学識経験者をお招きして開催された「三大学共同化意見交換会」において、すでに手がかりとなるヒントが数多く述べられているように思われる。例えば、共同化の開始当初は、必要な科目数の確保が課題であったが、今後はいわゆるポスト／ウィズ・コロナはもとより新たな社会情勢や学生の状況を踏まえて、科目の構成や内容をどのように考えていくのかが課題になる。「教養教育では、決められたカリキュラムのもとで、学生が身に着けるべきことをあらかじめ設定するよりも、バラエティに富んだ科目を提供し、学生が自由に選択することで、身に着けたいものを主体的に学ぶことが望ましい」（林哲介京都大学名誉教授）。

「学生が教養教育で学ぶ科目や内容をカリキュラムで詳細に決めるのは、教養教育の趣旨にそぐわないと思われ、学生が学問の世界の豊かさにインスパイアされ、高校までの学び方を変化させることが教養教育の重要な役割である」（高橋由典京都大学国際高等教育院特定教授）。「教養教育を通して、学生が知の広がりを知り、様々なディシプリンの中で自ら物事を俯瞰して捉え、学問知を

活用しながら問い続けていける姿勢の育成も重要である」（飯吉弘子大阪市立大学高等教育研究院教授）。

他方で、筆者が機構運営委員長として最も重要な課題と考えているのは、三大学共同化に対する専門課程の教員の関わりについて、各大学で必ずしも十分に議論されていない点があるという点である。実は当初から担当教員の退職や辞退の増加が懸念され、その育成・確保は課題とされていた。「教養教育は共同化に任せるような認識があると思われ、各大学で専門課程の教員も含め、共同化科目にどのような科目を提供し、科目担当をどのように分担するのかを議論すべきである」（林同名誉教授）。

教養教育は、その意義を分かり合える教員によって成り立っている側面がある。教養教育には関心のなかった教員が、科目の担当を割り当てられて授業を担当することで、初めてその重要性や面白さに気づくこともあろう。かつて「京都の経済」を担当した、私自身もその一人である。同科目は、京都の経済を熟知し、地域金融業界の最前線で躍進する京都銀行といわば協働で行う講義であったが、その内容はリアリティがあり、刺激に富むものであった。

各大学にはそれぞれに掲げる教育目標があり、その達成のために教養教育が果たすべき役割を三大学で共有することも必要である。そのためにも学内で教養教育に関する議論を継続的に行う場があり、そこで各大学に共通する教養教育の明確な理念とその合意があることが、三大学共同化の名にふさわしい幅広い教員の参加と協働を実現していく第一歩になるのではないだろうか。

各大学の叡智を結集し、三大学共同化のさらなる進化と発展を期待したい。

(2) 教育 IR センターからの総合報告 - 2021年度(令和3年度) -

京都三大学教養教育研究・推進機構 教育 IR センター長／京都工芸繊維大学 教授
萩原 亮

はじめに

二年越しの‘コロナ禍’の事態を抜け出す道すがら皆目見えぬまま、2021年度末に至った。本年度の共同化教養教育は、基本的にオンライン方式を継続する形で実施され、当教育 IR センターにおいても、引き続き、この事態の影響を注視することが主な課題となった。IR活動は、本来、教育の価値や実りを前進させることを睨み取りサーチであろうから、外乱たるコロナ禍への対処を観る視点はあまり本質的でないとも言える。しかし、(日頃の研究の中で)当初には思いつかなかった観察が予想外の展望をもたらしてくれることは間々ある。この度のコロナ禍の下の事態についても、受講者の反応や動向を追跡・整理しておくことが、共同化教育が次なる段階へ発展するための指針を与えてくれるかも知れない。このように考え、2年目となったオンライン授業の影響などを、問題提起などを含め、簡潔に報告させていただく。ただし、分析は未だ不十分であるし、当方の個人的見解も含むかと思うが、寛容に見ていただきたい。それぞれの立場で共同化教養科目に参画されている各位にとっての一つの情報源となれば幸いである。

1. 大学別履修登録者数の推移

昨年度の報告の中で、コロナ禍勃発当初の混乱状況に触れ、その後の履修者数の推移に注意を払う必要性などを指摘した。それを受ける形で、まず、共同化教養科目に対する、各大学別の履修者動向に目を向ける。図1(a)、(b)は、大学別の総受講者数を、前期・後期別に、歴年推移として描いたグラフである。起点年度は、当共同化科目のスタート時点にとったので、共同化教養教育の大きな流れを表す図にもなっている。ここで注目するのは、昨~本年度に渡っているコロナ禍インパクトの影響であり、(a)の側、工芸繊維大学前期の受講者数の、前年度の激減から本年度の倍増へ転ずる変動が顕著である。やや混乱を呈した昨年度前期に、受講者数の上限が特例的に抑えられた経緯があり、それによって、工織大現2年次生が履修した教養科目数が大きく不足する状況にあった。それを本年度に一挙に補おうとした動向が見て取れる。こうした激しい変動は、府大と医大の受講者数には現れなかった。一方、(b)後期のグラフに目を向ければ、従前の平均値を穏やかに維持する結果になっている。ただし、医大の後期受講者数には、割合で見ても無視できない低下があった。

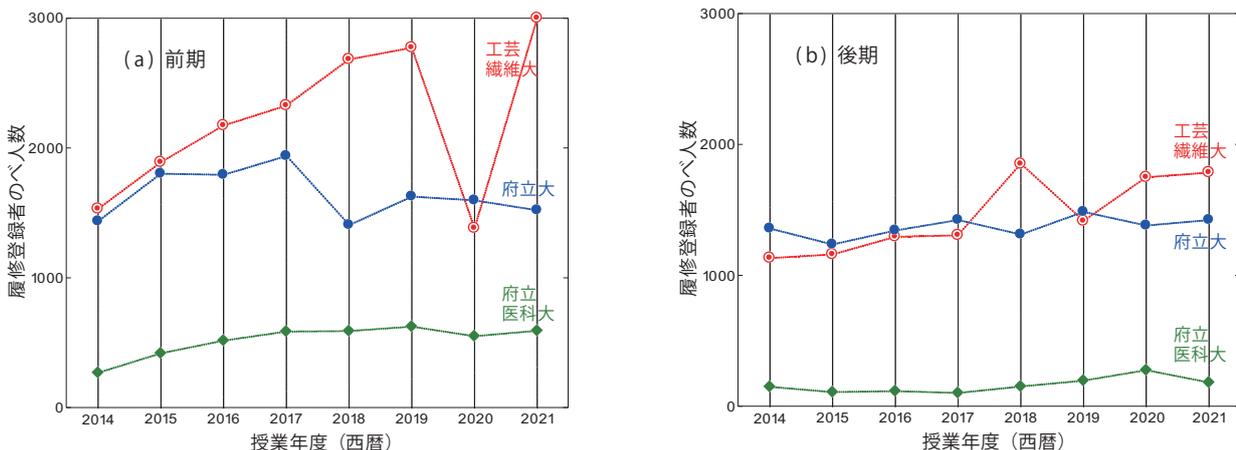


図1. 共同化教養科目(全体)の大学別履修者数の年度推移。(a): 前期科目、(b): 後期科目

図1(a),(b)を見れば、前年の工織大生の履修不足の解消は、もっぱら前期科目が担う形となったことがわかる。履修する教養科目を前期に集める傾向は、以前より各大学の学生に共通して見られていたが、今年度の工織大学生には、履修単位数を早く挽回しなければならないとする特段のプレッシャーがあったことが窺える。ただし、結果的に、前期科目の受講者数が、極端に多くなり、所属大学別のバランスが偏ることにもなった。これは共同化教養教育の趣旨に照らして反省すべき事態であり、今後、同様のことが生じないように、科目構成や受講者決定の制度について議論する必要性を示唆している。コロナ禍の混迷が終わる段階を待って、それぞれの大学の学生が、そもそも、どの時期にどのような内容の教養科目を求めているのかをあらためて調査し、前・後期への科目分配などを検討することが望ましいと考えている。

2. オンライン授業に対する学生の声 —授業アンケートより—

三大学共同化教養教育では、(各大学の制度によるものとは独立の)「授業アンケート」を実施してきた。昨年度、コロナ禍の影響で一旦中止されたが、今年度は、オンライン授業が有効に機能したかどうかについて自由記述で答えてもらう記入欄を新たに加えた形で再開させた。以下、その新設の問いに対する前期分の回答結果を整理した内容を中心に報告する。

提出者の割合は、履修者総数に対して45.2%であった。記述形式であるから、多様な感想・意見が寄せられたが、内容は、オンライン形式の有効性の評価の類(以下「前半」と称する)と、感想・意見の類(以下「後半」とする)に大別することができた。前半、後半それぞれの結果を図2と図3に分けて示す。

まず、オンライン形式が有効に機能したかどう

かについては、明確に否定的に答えた者は1割程度であり、積極的に肯定する意見が多数を占めた。一方、有効性の程度には言及せず、自由意見のみを述べた者が20%いたことも大事な情報である。オンライン授業は、個々の担当教員の相当の尽力によって成り立っていることを受講者もよく承知している。したがって、授業コンテンツの価値は肯定的に取るけれど、オンライン方式が最良ではないとの思いを反映した回答が、この20%に分類されていると考えるべきである。「オンライン授業は受講生に好評だった」のような単純な見方をしないように気をつけた方がいい。

このことに注意しつつ後半の図を見ていく。意見類型で、最多を占めたものが図中のA類、すなわち、都合のよいときに視聴・学習できるメリットを上げたものだ。この意見は肯定的評価ではあるが、背後で大事な問題を示唆しており、90分間拘束される大学の講義時間に対する忌避感の表れとも考えられる。次に多かった意見がB類であり、繰り返し視聴できることを良く評価する意見である。これも、口頭説明に頼った講義のやり方に一定の反省を求める意味を有している。従来型授業では、受講者の聞き逃しや写し損ねに対するケアが十分でなかったことを反省させられる。今後、対面授業が再開されるに至った場合でも、重要な部分の説明には、繰り返し視聴ができるコンテンツを併用すべきであることがわかる。C、D、F類の意見は、オンライン授業の欠点を指摘するものであり、A、B類などの肯定意見と組み合わせた記述もかなり見られた。Cの「実感が湧かない」という訴えは、「勉強(あるいは教員から見れば授業準備)が『PC操作』と同義語になりかけている昨今の事態が、本当は異常なのだという(当たり前の)認識を、あらためて目覚めさせてくれる真っ当な感想だ。D類の、対人的な交流の機会が得られないとの意見は、オンライン方式の最大の弱点を指摘するものだ。特に、教養科目の

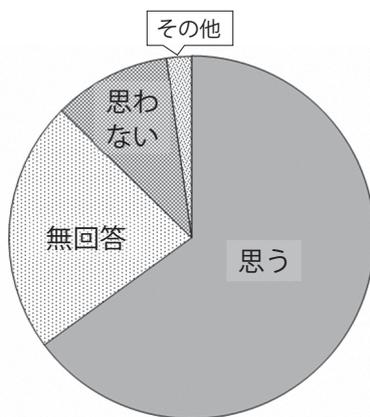


図2 自由記述Ⅰの「オンライン授業の形式が有効に機能したと思うか」に対する回答分布

表 自由記述Ⅰの回答に記述された内容の類型

類型区分	件数	%	意見要素の主旨
A	97	32	自分の都合に合う時間・場所で学習できることが良かった。
B	55	18	繰り返し視聴などができて、確認や復習がしやすい。 (特に、オンデマンドの動画配信が好評)
C	25	8	オンラインでは授業を受けている感覚がもてない。対面の方が集中できる。
D	25	8	他の学生との議論、意見交換、その他交流ができない。
E	11	4	新型コロナウイルス感染症対策として有効であった。
F	7	2	オンラインでは、質問しにくい。
その他	28	28	
計	304		

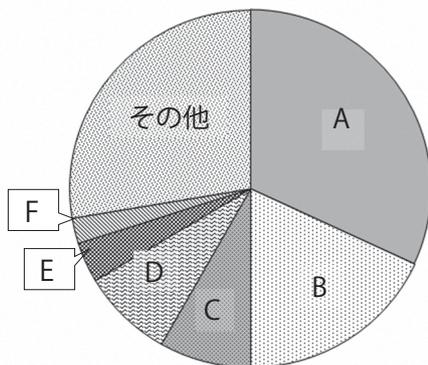


図3 自由記述Ⅰの回答に記述された内容の類型別分布

受講者は、所属がまちまちであるから、一つのクラスの中で、最後まで顔を知ることのない多くの受講者とともに1学期を過ごすという不自然な事態が起こり得る。人数があまり多くない科目であれば、ライブのオンライン授業の中で受講者がビデオ・オンで発言してくれることで、問題はかなり改善される。ただし、私の経験の範囲で、積極的に発言する学生でも、自主的に姿を映す者はほとんどいない。人の交流を重視するのであれば、やはり、オンライン方式を離れる必要があることを再認識する。

アンケート整理の最後として、図3の「その他」に分類した記述のいくつかに触れる。耳を傾けるべき意見として、「サボろうと思えばサボれる」旨の指摘があった。オンラインミーティングの場合には、接続した状態で端末を離れても、出席状態との区別がつかないことの訴えと察する。ライブ対話的な要素をとり入れている授業であれば、順番にビデオ・オンを要求するなどして反応を観れば、対策ができる。また、eラーニングシステムの機能を使って、授業中に、参加者全員から、その場で聞いた事に対する応答を受ける方式も考えられる。しかし、いずれにしても、受講者の人数が多くなれば、毎回厳密にチェックすることは容易でないだろう。これは、クラスの人数規模の問題にとどまらず、教養系の講義の本来的な意義を見据えた上で、実施様態をどのようにデザインすべきかという大きな問題提起につながっている。

3. 担当者会議の実施について

本年度12月には、共同化科目の担当教員が、授業実践に関する情報を交換するための「科目担当者会議」を開催した。テーマを‘オンライン授業の活かし方と可能性を探る’として、リベラルアーツゼミナールを担当されている児玉英明、石田昭人、播磨弘の三氏から、先ずゼミナールの

実践にかかる報告をしていただき、続く全体討論をとおして意見と情報の交換を行った。報告された内容は、本報告書第2部に掲載されているので、是非ご覧いただきたい。

むすびのひとこと

‘安泰’の対極の言葉を探して形容する他にない社会の情勢である。コロナ禍の継続で暗澹とする中、東欧-ロシア境界がただならぬ事態に突入している。その以前からであるが、エネルギー源や希少元素の市場・流通にも異変が生じている(液体Heの購入を要する実験は、国内総停止状態だ)。こうした、個人の力の及ばぬことに対して、人は、遠くから良し悪しと思うだけになってしまいがちだが、そこでとどまれば、事態は良い方向かわず、しばしば悪化を助長する。多くの人々が確かな知識・見識に基づく意見を持ち、必要に応じて訴える力を備えることが民主主義の大前提であり、そこに‘教養教育’の本質的意義・役割がある。

良し悪し以外の何が大切かと問われたなら、事象の相互の関係性や長いスパンの経緯を見抜く力と答えるのがよいと思う。このことは、国際問題の理解などに限らず、理工学的な実験の見方に対してもよく当てはまる。結果の良し悪しとその原因のように考えてしまうと、大抵の場合に解決に至らない。何と何が如何に関係しているかを分析し、それを言葉で表したときに、採るべき方向性が見えてくるものだ。混迷を呈する目下の時代、このような分析力の土台となる知識と思考力を鍛える大学の教養の重要性が一段と高まっている。

(3) 令和3年度のリベラルアーツセンターの活動を総括して

京都三大学教養教育研究・推進機構 リベラルアーツセンター長／京都府立大学 教授

岡本 隆司

本年度も一昨年度末より本格化してきたいわゆるコロナ禍の影響で、センターの活動も昨年と同じく、年度当初より多大な影響を被らざるをえなかった。

- 1) 令和3年度のカリキュラム構成（科目）の考え方
- 2) 学生交流事業の企画
- 3) 今後の展望

1) 3年度のカリキュラム構成（科目）の考え方

令和3年度は合計80の共同化科目を用意して、十分な種類と数の授業を提供できたと考えている。

全体のカリキュラムも、昨年度までの成果に準拠して、人文・社会・自然諸分野の学術を俯瞰し、その基礎を学習するとともに、世界の多様性を感じ、日常社会に生じる問題の真理を探求する議論ができるような学生を育成する考え方にもとづいて構成しており、当面は所期の目標にかなう現状である。

もとより学生のニーズ・社会の要請に応じて、科目の内容・構成に改編・洗練を加えていくことは不可避である。他方、担当人員・配当予算などの制約によって、休止・廃止を考慮せざるをえない科目もある。

以上の科目数の維持や担当のあり方などについては、昨年度までのリベラルアーツセンターでの協議を経て、従来の原則などを尊重しつつ、柔軟に対応してゆく方針を確認してきた。

しかしながらすでに言及のあるように、新型コロナウイルス感染状況の改善は遅々として進まず、なお昨年ベースの対処にとどまらざるをえな

かったため、今年度もオンライン化に対応した既存授業の運営でおよそ精一杯で、カリキュラム全体をみわたしたうえでの科目の検討・見直しなどは、なお手の回らない状況が続いて現在に至っている。

それでも授業運営の改善は少しずつ試みており、前期にはリベラルアーツ・ゼミナールの一部科目で、一部対面授業の実施にふみきり、さらに後期は、リベラルアーツ・ゼミナール科目を原則として全面対面化した。

またそれに関連して、下記の学生交流事業を復活させようとの模索も続いている。今年度の担当者会議でも、授業の対面化・交流活動の全面的な復活にとりくむ強い意欲・姿勢が表明された。

以上は三大学教養教育共同化事業の理念とも関わる重大な課題である。コロナ禍の収束がみえない状況では、カリキュラムの改訂もふくめ、事務的・実務的になお困難と紆余曲折が予想されるけれども、状況をにらみつつ、着実にとりくんでいかねばならない。

総じて困難な状況のなか、今年度も関係各位のご助力で、予定した科目を通常どおり開講できた。コロナ禍の収束はなお不透明である以上、授業形態の再考もふくめたカリキュラム構成の再検討にも取り組む必要性が出てくるだろう。あらためてリベラルアーツセンターの役割もみなおしていかねばならない。

2) 学生交流事業

リベラルアーツセンターは例年、三大学の事業として、学生の自主的な交流事業の推進を積極的にバックアップしてきた。三年前まで続けてきた合宿研修、そして一昨年度の三大学学生交流会結成と交流集会開催は、本欄でも特筆してきたところである。

とくに一昨年度は、事業全体をリニューアルし、学生によるFDともいべき交流集会を試みるなど、ようやく学生主体の活動が緒についた。学生交流会はひきつづき、具体的な事業計画の立案を続け、いっそう積極的な活動を期していたのである。

ところが、このような学生交流事業も、コロナ禍でいっさい休止のやむなきにいたり、時間の経過とともに、学生同士のつながりも薄れ、これまで培ったノウハウも喪失の危機にある。痛恨の思いを禁じ得ない。

リモート・オンデマンドなどで、授業を成立させるだけで手一杯の現状では、いわば課外活動、しかも学生・教職員が集まることを前提にした学生交流事業などは、とても手がつけられない。

しかし幸い今年度下半期になって、新たな動きがおこっている。学生の側から交流活動開始を望む声があがり、自主的にグループ討論の企画を立案、ゼミナールの受講生有志を主体に、さる12月に試行した。三大学機構としても、学生と連絡をとりつつ非公式的なサポートを続けている。学生の側から交流のニーズが存在し、また具体的な試みもはじまったのは、たいへん心強い。

このような学生の意欲に応えることは必須ながら、コロナ禍の収束の見通しがつくまでは、公式の学生交流事業の企画・開催はやはりおぼつかない。上述のリベラルアーツ・ゼミナールの方向性と合わせて、課題となる。しかしリベラルアーツセンターとしても、来たるべき原状復帰のあかつきに、学生の主体的積極的な取り組みが、なるべくスムーズに復活できるような態勢づくりを模索していかなければならない。

3) 今後の展望

今年度も「ウィズコロナ」のなか、なお試行錯

誤を強いられた一年であった。感染拡大の波がくり返される中、現行カリキュラムの授業実施は、なお少なからず課題は残しながらも、軌道には乗りつつある。しかしオンライン形態の授業が定着し、学生の意識・行動も変化する状況にあって、従来どおり通学・対面を前提にしての原状回復は望むべくもない。

それならリベラルアーツセンターとしても、いわゆる「ウィズコロナ」の状況を前提に、専門教育の前提かつ背景をなし、全人的な素養をささえるリベラルアーツの理念に即した科目の検討・再編、そして学生育成の方策を提案してゆく任務にたちかえらねばならない。

そのため具体的にどのような対策・企画が考えられるのか。授業に関しては、オンライン・対面など既成の多様な形態をいかに適切に生かしていくのか、新たなあり方・しくみを模索する必要がある。また学生の自主的な交流活動も、「ウィズコロナ」に即した形で再構築をはかっていかなければならない。

あらためて関係各位のご高見・ご支援を切に求める次第である。

(4) 令和3年度三大学教養教育共同化の取組

(共同化教養教育等の概要)

京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学の京都三大学による共同化授業が平成26年4月に始められ、今年度で8年目を迎える。文部科学省の大学間連携共同教育推進事業補助金を受けての運営を経て、事業費を三大学で相互に負担しながらの独自事業としての取組も今年度で5年目となった。

三大学での共同化教養教育は、個々には規模が小さく、各大学で提供できる科目に限りがあるため、各大学の強みと特徴を生かした教養科目を相互に提供し、提供されたすべての科目を各大学が自大学の科目とすることによって、学生の科目選択の幅を大きく増やし、学修意欲を高めようとするものである。

文系、理工系、医学系の専門分野や将来の志望が異なる三大学の学生が授業で混在し、多様な視点や価値観を持つ学生と一緒に学び交流することを通じ、豊かな人間性の形成に資することもねらいとしている。平成26年夏に、京都府立大学下鴨キャンパス内に教養教育共同化施設「稻盛記念会館」が整備され、同年後期授業からは同施設が教養教育の拠点となり、学生間交流に大きく寄与してきている。

今年度も三大学で協議の上、共通の学年暦を定め、前期は4月12日(月)から8月2(月)(試験日を含む)、後期は9月27日(月)から1月31日(月)(試験日を含む)とし、毎週月曜日に開講した。共同化開始当初から開講していた3~5コースに加え、平成29年度から開始した月曜日午前の共同化授業も引き続き6科目開講した。

このほか、例年取り組んでいる集中講義を、夏期休業期間中に6科目開講した。

また、三大学教養教育共同化が展開される以前から三大学間で実施されていた単位互換制度については、三大学合わせて27科目とした。

なお、単位互換制度については、令和元年度から履修登録者の減少が続いていることから、運営委員会で制度の見直し等を検討したところ、当初の目的を達したとの意見が大勢を占め、令和3年度をもって廃止することが最終的に合意されるこ

ととなった。

(令和3年度共同化カリキュラムの概要)

令和3年度は、共同化科目として80科目を開講した。これまでの科目を整理し、現代医療の課題や学際的な科目を新設するとともに、集中講義の「時間生物特論」を全回生に解放するなどして科目の魅力拡大を図った。提供科目数は昨年度に比べると1科目の減となったが、共同化開始年度である平成26年度とでは12科目増加したことになる。

科目群別では、「人間と文化」30科目、「人間と社会」25科目、「人間と自然」25科目と、諸分野をバランスよく提供することに努めた。

80科目を提供大学別にみると、京都工芸繊維大学が31科目、京都府立大学が23科目、京都府立医科大学が12科目、機構が14科目となる。

この結果、共同化開始前に比べ学生の科目選択幅は、各大学により異なるものの、2.2倍~5.2倍に大きく拡大した。

共同化事業開始当初から取り組んでいる『京都学』科目は、15科目開講した。京都工芸繊維大学が2科目、京都府立大学が8科目、機構が5科目担当し、各大学の専門性を生かしつつ多様な『京都学』科目を提供した。

また、少人数で学生同士が交流し、共通のテーマで対話し議論する力を育むことをねらいとした「リベラルアーツ・ゼミナール」は、11科目を開講した。考え方や学び方の基礎力を培う授業やグローバルな視野を広げる集中講義、アクティブラーニングを取り入れたゼミナールなど、多彩な内容を提供している。

学び続ける教養教育の一環で、平成27年度から取り組んでいる上回生を対象とした高度教養教育科目については8科目、語学・異文化理解科目についても7科目を、昨年度と同じく開講した。

(履修登録の状況)

令和3年度前期の共同化科目は43科目で、提供大学別内訳は、京都工芸繊維大学が16科目、京都府立大学が14科目、京都府立医科大学が6科目、機構が7科目である。また、43科目中、

6科目は夏期集中講義科目として開講した。

学生の履修登録の状況は、別表「三大学教養教育共同化科目の履修登録者（令和3年度前期）」のとおりである。履修登録者総数が5,123人で、大学別では、京都工芸繊維大学が3,004人、京都府立大学が1,524人、京都府立医科大学が595人である。三大学学生の交流状況を示す自大学以外の科目を履修登録した学生（機構提供科目履修者を除く）は2,569人であり、履修登録者総数（機構提供科目履修者を除く）4,838人に占める割合は53.1%であった。

次に、後期の共同化科目は37科目で、提供大学別内訳は、京都工芸繊維大学が15科目、京都府立大学が9科目、京都府立医科大学が6科目、機構から7科目である。

学生の履修登録の状況は、別表「三大学教養教育共同化科目の履修登録者（令和3年度後期）」のとおりである。履修登録者総数が3,401人で、大学別では、京都工芸繊維大学が1,789人、京都府立大学が1,426人、京都府立医科大学が186人である。三大学学生の交流状況を示す自大学以外の科目を履修登録した学生（機構提供科目履修者を除く）は1,401人であり、履修登録者総数（機構提供科目履修者を除く）2,990人に占める割合は46.9%であった。

これらの結果、前期と後期を合わせた通年での履修者総数は8,524人で、前年度に比べ1,569人増加（+22.6%）した。

大学別では、京都工芸繊維大学が対前年度比で1,655人増加（+52.7%）。京都府立大学が34人減少（-1.1%）。京都府立医科大学が52人減少（-6.2%）という結果であった。

また、自大学以外の科目を履修登録した学生（機構提供科目履修者を除く）は3,970人であり、履修登録者総数（機構提供科目履修者を除く）7,828人に占める割合として通年で三大学学生の交流状況を示す交流率は50.7%にのぼり、昨年度に続き50パーセントを超えた。

なお、今年度は科目定員に対する履修者数の割合である履修率は88.2%と昨年度より2.4%増加したが、前期の履修登録者が増加し、前期の履修率が94.2%と高い状況であるため、今後引き続き

科目の開講時期の見直しを求めていく必要がある。

（履修定員調整）

教養教育共同化施設の整備に当たっては、マスプロ教育を避けるために教室規模を最大200人程度とされたこともあり、科目ごとにあらかじめ履修定員を設定の上、授業を実施することとしている。そのため、各科目において大学ごとに定員の配分を行い、定員を超える履修希望があった場合は抽選となるが、配分に当たっては、まずは、科目定員の半数を科目提供大学が、残りの半数をその他2校で1年生の学年定員数に応じ配分することを原則としている。

その上で、学生の履修希望を受け付け、科目ごとに各大学の履修希望数を集約し、定員に余剰が生じた大学があった場合には、その余剰分を他の大学に再配分するなどの工夫を行うことにより、可能な限り学生の履修希望にかなった定員配分となるように調整を行っている。

なお、今年度においては、新型コロナウイルス感染症の拡大が終息に至らなかったことから、一部の少人数教育講義を除いて、原則、遠隔講義をベースとして前後期共に講義を行ったところである。

（学生への受講ガイダンス）

共同化授業の取組について、受講する学生にわかりやすく周知を図るため、三大学共通のガイダンス冊子「京都三大学教養教育共同化科目受講案内」を作成した。

冊子には、この1冊があればスムーズに共同化授業が受講できるよう、共同化の理念・目的をはじめ、共同化科目の履修方法、共同化科目一覧、前・後期ごとの各科目の履修定員、科目概要、開講時間割などを掲載した。科目概要には、科目の説明だけでなく、当該科目担当教員の授業に対する姿勢や思いを学生へのメッセージとして、授業目的区分とともに掲載した。また昨年度から、共同化科目の受講生向けのアンケートから得た意見などを元に作成した、共同化に関するFAQを掲載している。

学生への受講ガイダンスは、各大学で実施される新入生履修ガイダンス時に、関連冊子の配布と説明を行った。

令和3年度 共同化科目一覧

科目群	科目名	担当教員	開講	授業目的区分		
				A	B	C
人間と歴史	哲学	工・伊藤 徹	後	○	○	○
	比較宗教学	工・榎田 勇樹	前	○	○	○
	宗教と文化	医・田中 純子	後	○	○	○
	日本史	工・浅井 雅	後	○	○	○
	東西文化交流史	工・宮本 亮一	後	○	○	○
	アジアの歴史と文化	府・諫早 直人	前	○	○	○
	ヨーロッパの歴史と文化	府・阿部 拓哉	前	○	○	○
	ラテン語	医・松本 加奈子	後	○	○	○
	西洋文化論	工・山下 太郎	後	○	○	○
	日本近現代文学	工・高木 彬	後	○	○	○
文化・芸術	西洋文学論	工・山下 大吾	前	○	○	○
	文芸創作論	医・藤田 佳信	後	○	○	○
	美と芸術	工・村上 真樹	前	○	○	○
	日本近代精神史	工・伊藤 徹	前	○	○	○
	フランス語圏の文化とジャポニスム(※2回生以上)	工・吉川 順子	前(午前)	○	○	○
	映画で学ぶ英語と文化(※3回生以上)	府・山口 美知代	後(午前)	○	○	○
	映画で学ぶドイツ語と文化(※3回生以上)	府・藤山 結子	前(午前)	○	○	○
	医療人類学	医・野上 恵美	前	○	○	○
	認知心理学	医・田村 厚彦	前	○	○	○
	京都の歴史Ⅰ	府・渡辺 哲也	前	○	○	○
京都市学	京都の歴史Ⅱ	府・小林 啓治	後	○	○	○
	京都の文学Ⅰ	府・安達 敬子	前	○	○	○
	京都の文学Ⅱ	府・本井 牧子	後	○	○	○
	京の意匠	工・中野 仁ほか	後	○	○	○
	英語で京都(※3回生以上)	府・山口 エリノ	後	○	○	○
	京都の文化と文化財	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)(※2回生以上)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	京都の文化と文化財	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
リベラルアーツ・ゼミナール	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
社会科学の基礎	社会学Ⅰ	府・田島 知之	前	○	○	○
	社会学Ⅱ	府・中谷 勇哉	後	○	○	○
	政治学	工・西村 真彰	後	○	○	○
	国際政治	府・宮崎 勇治	後	○	○	○
	経済学入門	工・見光 太郎	後	○	○	○
	法学	工・北村 幸也	前	○	○	○
	医療と社会	医・泉山 千愛	前	○	○	○
	生活と経済	府・小沢 修司	後	○	○	○
	心理学	工・大谷 秀夫	前	○	○	○
	発達心理学	医・小川 藤子	前	○	○	○
人間と社会	現代社会と心	府・石田 正浩	後	○	○	○
	現代社会とジェンダー	府・中野 成典	前	○	○	○
	現代教育論	工・塩原 真子	前	○	○	○
	環境と法	工・須田 守	後	○	○	○
	観光学α(※2回生以上)	府・宗田 好史	前(午前)	○	○	○
	SDGsをまなぶ	工・眞砂 舞尚	後	○	○	○
	現代医療の人間観	医・七岡 良彦	後	○	○	○
	近代京都と三大学	機・宗田 好史	前	○	○	○
	京の産業技術史	工・畑 智子	前	○	○	○
	現代京都論	府・大島 祥子	前	○	○	○
京都市学	京都の経済	機・小沢 修司	後	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
リベラルアーツ・ゼミナール	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
人間と自然	物理学Ⅰ	府・安田 啓介	前	○	○	○
	化学概論Ⅰ	工・三木 定雄	前	○	○	○
	化学概論Ⅱ	工・石川 洋一	前	○	○	○
	生物学概論Ⅰ	工・疋田 秀	前	○	○	○
	生物学概論Ⅱ	工・疋田 秀	前	○	○	○
	生命科学講話	府・藤本 康浩	前	○	○	○
	地球の科学	工・酒井 敏	後	○	○	○
	物理学Ⅱ	府・安田 啓介	前	○	○	○
	化学概論Ⅲ	工・三木 定雄	前	○	○	○
	生物学概論Ⅲ	工・疋田 秀	前	○	○	○

科目群	科目名	担当教員	開講	授業目的区分		
				A	B	C
人間と自然・科学	人と自然と数学α	工・峯 拓矢	前	○	○	○
	人と自然と数学β	工・磯崎 泰樹	後	○	○	○
	人と自然と物理学	工・萩原 亮ほか	後	○	○	○
	生物学的人間学	医・小野 藤彦	前	○	○	○
	科学史	工・大西 琢朗	前	○	○	○
	環境問題と持続可能な社会	工・山田 悦	前	○	○	○
	食と健康の科学	府・小林 伸子	前	○	○	○
	キャンパスヘルス概論	工・荒井 宏司	前	○	○	○
	時間生物学特論(※修士課程大学院生まで対象)	医・八木田 和弘	集中	○	○	○
	エネルギー科学	工・林 康明	前	○	○	○
京都学	現代科学と倫理	府・岩崎 豪人	前	○	○	○
	医学概論(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	医・奥田 可ほか	後(午前)	○	○	○
	京都の農林業	府・中村 貴子	後	○	○	○
	京都の防災と府民	機・松岡 美ほか	後	○	○	○
	京都の自然(注)	府・平山 真美子	前	○	○	○
	観光学α(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・石田 昭人	前	○	○	○
	観光学β(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・石田 昭人	前	○	○	○
	観光学γ(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・石田 昭人	前	○	○	○
	観光学δ(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・石田 昭人	前	○	○	○
	観光学ε(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・石田 昭人	前	○	○	○
リベラルアーツ・ゼミナール	観光学α(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・石田 昭人	前	○	○	○
	観光学β(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・石田 昭人	前	○	○	○
	観光学γ(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・石田 昭人	前	○	○	○
	観光学δ(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・石田 昭人	前	○	○	○
	観光学ε(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・石田 昭人	前	○	○	○
	観光学ζ(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・石田 昭人	前	○	○	○
	観光学η(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・石田 昭人	前	○	○	○
	観光学θ(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・石田 昭人	前	○	○	○
	観光学ι(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・石田 昭人	前	○	○	○
	観光学κ(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・石田 昭人	前	○	○	○
合計80科目						
(再掲)リベラルアーツ・ゼミナール(11科目)	観光学α(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学β(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学γ(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学δ(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学ε(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学ζ(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学η(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学θ(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学ι(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学κ(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
集中開講	観光学α(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学β(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学γ(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学δ(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学ε(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学ζ(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学η(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学θ(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学ι(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	観光学κ(※2回生以上の工職大・府大生が対象)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
(再掲)京都市学(15科目)	京都の歴史Ⅰ	府・渡辺 哲也	前	○	○	○
	京都の歴史Ⅱ	府・小林 啓治	後	○	○	○
	京都の文学Ⅰ	府・安達 敬子	前	○	○	○
	京都の文学Ⅱ	府・本井 牧子	後	○	○	○
	京の意匠	工・中野 仁ほか	後	○	○	○
	英語で京都(※3回生以上)	府・山口 エリノ	後	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)(※2回生以上)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
(再掲)2回生以上向け開講(8科目)	フランス語圏の文化とジャポニスム(※2回生以上)	工・吉川 順子	前(午前)	○	○	○
	映画で学ぶ英語と文化(※3回生以上)	府・山口 美知代	後(午前)	○	○	○
	映画で学ぶドイツ語と文化(※3回生以上)	府・藤山 結子	前(午前)	○	○	○
	英語で京都(※3回生以上)	府・山口 エリノ	後	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)(※2回生以上)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○
	現代京都市学(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・藤本 仁文ほか	後(午前)	○	○	○

注：今年度開講の「京都の自然」は、内容が重複するため令和元年度まで開講の「京都の自然と森林」を履修した学生は履修することができません。

担当教員(それぞれの略称は、科目の提供大学・機関を示します。)

工：京都工芸繊維大学、府：京都府立大学、医：京都府立医科大学、機：京都三大学教養教育研究・推進機構

授業目的区分(○は該当するもの、◎は特に強調するもの)

A：人文・社会・自然の諸分野の学術体系を俯瞰しながらこれらの基礎を幅広く学習し、学術への高い関心を育てる。

B：世界の人々の多様な生き方を受容し、人としての豊かな感性や倫理観を拡張する。

C：日々社会に生じる種々の問題において、真理や正義を追求する議論に習熟する。

三大学教養教育共同化科目の履修登録者（2021年度前期）

	提供 大学	開 講 コース	科 目 名	履修 定員	履修者数				交流率	履修率
					工織大	府大	医大	合計		
1	工織大	月2	フランス語圏の文化とジャポニスム(※2回生以上)	30	16	3	0	19	15.8%	63.3%
2	府大	月2	映画で学ぶドイツ語と文化(※3回生以上)	30	5	3	0	8	62.5%	26.7%
3	府大	月2	観光学α(※2回生以上)	140	40	54	0	94	42.6%	67.1%
4	工織大	月3	日本近代精神史	99	48	24	2	74	35.1%	74.7%
5	工織大	月3	法学	99	53	30	9	92	42.4%	92.9%
6	工織大	月3	現代教育論	99	65	17	12	94	31.2%	93.9%
7	工織大	月3	京の産業技術史	120	79	18	3	100	21.0%	83.3%
8	工織大	月3	科学史	99	67	22	4	93	28.0%	93.9%
9	工織大	月3	環境問題と持続可能な社会	120	54	46	19	119	54.6%	99.2%
10	府大	月3	京都の歴史 I	299	149	123	19	291	57.7%	97.3%
11	府大	月3	社会学 I	174	66	91	14	171	46.8%	98.3%
12	府大	月3	現代京都論	196	73	97	24	194	50.3%	99.5%
13	府大	月3	物理学 I	99	73	18	8	99	81.8%	100.0%
14	医大	月3	認知心理学	120	41	23	56	120	53.3%	100.0%
15	機構	月3	製品の機能から科学を学ぶ(リベラルアーツ・ゼミナール)	30	15	4	10	29	100.0%	96.7%
16	工織大	月4	美と芸術	196	98	66	30	194	49.5%	99.0%
17	工織大	月4	化学概論 I	99	67	30	2	99	32.3%	100.0%
18	工織大	月4	人と自然と数学α	174	171	2	1	174	1.7%	100.0%
19	工織大	月4	キャンパスヘルス概論	204	102	70	32	204	50.0%	100.0%
20	府大	月4	京都の文学 I	99	42	45	7	94	52.1%	94.9%
21	府大	月4	食と健康の科学	120	44	63	10	117	46.2%	97.5%
22	医大	月4	医療人類学	99	28	15	52	95	45.3%	96.0%
23	医大	月4	医療と社会	99	47	30	9	86	89.5%	86.9%
24	医大	月4	生物学的人間学	120	44	36	36	116	69.0%	96.7%
25	機構	月4	近代京都と三大学	99	57	35	3	95	100.0%	96.0%
26	機構	月4	現代社会に学ぶ問う力・書く力 a(リベラルアーツ・ゼミナール)	30	13	10	7	30	100.0%	100.0%
27	機構	月4	レーザーで測る、創る、楽しむ(リベラルアーツ・ゼミナール)	30	24	5	1	30	100.0%	100.0%
28	工織大	月5	比較宗教学	196	105	55	34	194	45.9%	99.0%
29	工織大	月5	西洋文学論	99	41	23	7	71	42.3%	71.7%
30	工織大	月5	心理学	174	102	40	31	173	41.0%	99.4%
31	工織大	月5	生物学概論 I	99	53	31	10	94	43.6%	94.9%
32	工織大	月5	エネルギー科学	120	113	6	0	119	5.0%	99.2%
33	府大	月5	アジアの歴史と文化	99	50	34	8	92	63.0%	92.9%
34	府大	月5	国際政治	99	40	34	5	79	57.0%	79.8%
35	府大	月5	現代社会とジェンダー	120	45	59	15	119	50.4%	99.2%
36	府大	月5	現代科学と倫理	99	57	13	0	70	81.4%	70.7%
37	府大	月5	京都の自然	299	196	84	16	296	71.6%	99.0%
38	機構	月5	現代社会に学ぶ問う力・書く力 b(リベラルアーツ・ゼミナール)	30	9	2	12	23	100.0%	76.7%
39	府大	集中	生命科学講話	660	517	116	24	657	82.3%	99.5%
40	医大	集中	発達心理学	99	29	20	48	97	50.5%	98.0%
41	医大	集中	時間生物学特論(※3回生以上(修士課程大学院生を含む))	30	29	1	0	30	100.0%	100.0%
42	機構	集中	現代イスラーム世界の文化と社会(リベラルアーツ・ゼミナール)	30	10	10	8	28	100.0%	93.3%
43	機構	集中	感性の実践哲学(リベラルアーツ・ゼミナール)	30	17	6	2	25	100.0%	83.3%
44	機構	集中	世界はいま(リベラルアーツ・ゼミナール)	30	10	10	5	25	100.0%	83.3%
			合 計	5,436	3,004	1,524	595	5,123	53.1%	94.2%

(注) 交流率：科目提供大学以外の大学の履修者数をその科目の全履修者数で割った値。

三大学教養教育共同化科目の履修登録者（2021年度後期）

	提供大学	開講コース	科目名	履修定員	履修者数				交流率	履修率
					工織大	府大	医大	合計		
1	医大	月1	医学概論（※2回生以上の工織大・府大生）	120	29	16	0	45	100.0%	37.5%
2	府大	月2	映画で学ぶ英語と文化（※3回生以上）	30	14	14	0	28	50.0%	93.3%
3	機構	月2	資料で親しむ京都学（リベラルアーツ・ゼミナル）（※2回生以上）	20	1	9	0	10	100.0%	50.0%
4	工織大	月3	哲学	99	62	26	5	93	33.3%	93.9%
5	工織大	月3	東西文化交流史	174	98	58	16	172	43.0%	98.9%
6	工織大	月3	日本近現代文学	174	91	74	7	172	47.1%	98.9%
7	工織大	月3	政治学	99	37	21	2	60	38.3%	60.6%
8	工織大	月3	SDGsをまなぶ	99	36	31	9	76	52.6%	76.8%
9	府大	月3	京都の歴史Ⅱ	299	83	110	6	199	44.7%	66.6%
10	府大	月3	英語で京都（※3回生以上）	30	0	6	0	6	0.0%	20.0%
11	府大	月3	社会学Ⅱ	196	81	103	11	195	47.2%	99.5%
12	医大	月3	宗教と文化	120	11	15	10	36	72.2%	30.0%
13	医大	月3	文芸創作論	99	14	19	5	38	86.8%	38.4%
14	機構	月3	京都の経済	120	85	27	3	115	100.0%	95.8%
15	機構	月3	意外と知らない植物の世界（リベラルアーツ・ゼミナル）	30	12	13	4	29	100.0%	96.7%
16	工織大	月4	日本史	120	68	44	7	119	42.9%	99.2%
17	工織大	月4	環境と法	99	69	28	1	98	29.6%	99.0%
18	工織大	月4	人と自然と数学β	99	9	2	1	12	25.0%	12.1%
19	工織大	月4	人と自然と物理学	99	19	1	1	21	9.5%	21.2%
20	府大	月4	ヨーロッパの歴史と文化	174	77	94	2	173	45.7%	99.4%
21	府大	月4	京都の文学Ⅱ	99	49	47	3	99	52.5%	100.0%
22	府大	月4	現代社会と心	196	78	102	15	195	47.7%	99.5%
23	医大	月4	ラテン語	120	50	35	28	113	75.2%	94.2%
24	医大	月4	現代医療の人間観	99	13	13	19	45	57.8%	45.5%
25	機構	月4	社会科学の学び方（リベラルアーツ・ゼミナル）	30	9	5	1	15	100.0%	50.0%
26	機構	月4	京都の防災と府民	120	60	54	4	118	100.0%	98.3%
27	工織大	月5	西洋文化論	120	64	50	6	120	46.7%	100.0%
28	工織大	月5	京の意匠	174	115	58	1	174	33.9%	100.0%
29	工織大	月5	経済学入門	120	74	38	3	115	35.7%	95.8%
30	工織大	月5	化学概論Ⅱ	99	40	4	3	47	14.9%	47.5%
31	工織大	月5	生物学概論Ⅱ	99	29	33	1	63	54.0%	63.6%
32	工織大	月5	地球の科学	174	104	66	4	174	40.2%	100.0%
33	府大	月5	生活と経済	99	64	32	2	98	67.3%	99.0%
34	府大	月5	京都の農林業	196	86	104	5	195	46.7%	99.5%
35	医大	月5	現代正義論（リベラルアーツ・ゼミナル）	30	4	5	0	9	100.0%	30.0%
36	機構	月5	京都の文化と文化財	120	53	63	1	117	100.0%	97.5%
37	機構	月5	経営哲学（リベラルアーツ・ゼミナル）（※2回生以上）	30	1	6	0	7	100.0%	23.3%
			合計	4,225	1,789	1,426	186	3,401	46.9%	80.5%

(注) 交流率：科目提供大学以外の大学の履修者数をその科目の全履修者数で割った値。

(1) 常態化する緊急事態におけるゼミナール教育 (科目名：現代社会に学ぶ問う力・書く力)

京都三大学教養教育研究・推進機構 非常勤講師
児玉 英明

1. 常態化する緊急事態

2021年度の前期は、まん延防止等重点措置と緊急事態宣言が繰り返し発令されたことで、緊急事態が常態化してしまった。全15回の授業の内、正常化していたのは7月19日(第14回)と7月26日(第15回)の2回のみである。

2021年度前期 常態化する緊急事態

4月	12日	19日	26日	
5月	10日	17日	24日	31日
6月	7日	14日	21日	28日
7月	5日	12日	19日	26日

4月26日(第3回)から6月14日(第9回)にかけては緊急事態宣言が発令されており、その前後には、まん延防止等重点措置が発令されていた。9月3日には菅義偉首相が退陣を表明した。

著者が京都三大学教養教育研究・推進機構で、対面授業の形でリベラルアーツ・ゼミナールを開講したのは4月19日(第2回)、6月28日(第11回)、7月5日(第12回)、7月12日(第13回)、7月19日(第14回)、7月26日(第15回)の計6回である。

遠隔授業の間は、90分授業を10分授業に分割した動画を撮影して、YouTubeを活用したオ

ンデマンド授業で対応した。課外でZOOMを使った双方向型の意見交換会や上級生との交流会も開催したが、オンデマンドとオンラインの併用ではゼミナール本来の特長が十分に伝わらなかった。

想定外だったのは、リベラルアーツ・ゼミナールを6月28日(第11回)から「対面授業と遠隔授業の選択制」にした際に、遠隔授業を選ぶ学生が半数に上ったことである。感染リスクへの警戒感は一それぞれ異なっているため、対面授業を希望する学生にも、遠隔授業を希望する学生にも配慮する必要がある。しかし、ゼミナール型の授業を教室で開講することが可能になったにもかかわらず、登校を希望しない学生が半数も出たことは、リベラルアーツ・ゼミナールの運営に注力してきた著者にとっては意外だった。「アルバイトのためには外出したいが、授業は遠隔で揃えたい」と公言する学生もおり、コロナ前の受講生との違いを実感することもあった。

遠隔授業が主流になったがために、「講義型科目」と区別された「ゼミナール型科目」の特長が、学生に伝わらなくなっていることが懸念される。



2. 遠隔授業の副作用

その人の置かれた環境や立場によって、新型コロナウイルスの見え方は大きく変わる。他人の立場に立って考えているうちに、自分が有している警戒感とそれに基づく自粛の程度が、必ずしも正しいとは思えなくなるときが繰り返される。

著者の前任校の「滋賀大学彦根地区生活協同組合」は2021年3月31日に、「2020年度の生協の経営状態について」という文書を公表した。その中で、持続化給付金や雇用調整助成金などの支援を受けても、1,000万円の赤字が出たことが報告されている。これは滋賀大学に限らず、遠隔授業を増やし、学生の登校を制限した大学が抱える副作用である。感染対策から良かれと思って導入した遠隔授業によって、ともに大学を支えてきた構成員に雇用不安が発生している。

絶えず揺らぐ現状認識の中で、意思決定をすることは難しい。例えば、対面授業を行うのか遠隔授業を行うのかについても、教員一人ひとり、学生一人ひとりの置かれた状況によって意向が違うのだから、大学が組織として一律の決断を下すことは難しい。だから現状は教員個人の裁量に、授業形態の選択を委ねている大学が多いように思う。

しかし、学生からすれば、同じ曜日でも、ある時限は対面授業なのに、ある時限は遠隔授業というように、対面、遠隔双方の授業形態が入り混じり面倒である。学生の中には通学定期券を購入していない者もいる。たった1科目の対面授業のために、稲盛記念会館に通学しなければならないのかという不満もあろう。その面倒さから逃れるために、いっそのこと、全てのコマを遠隔授業にして時間割を組むという誘引が生まれる。その誘引は感染対策としての遠隔授業の導入、教員の裁量による授業形態の選択が生んだ副作用である。

3. 再考すべき共同化の理念

2021年10月から12月までは、比較的平穏な期間だった。感染症への恐怖感は一それぞれであり、その人の置かれた家庭環境なども影響する。もちろん、そのような個別事情は尊重すべきである。しかし、変異株の波が落ち着いている期間においても、履修人数にかかわらず、講義科目を一律遠隔で開講したことについては組織的な自己点検・評価が必要ではないか。

京都三大学教養教育研究・推進機構では、教養教育共同化を開始する際に、三つの柱を掲げた。第一に、各大学の強みと特徴を生かした科目を提供しあい、学生の科目選択の幅を広げ、学修意欲を一層高めることである。第二に、文系、理工系、医学系の専門分野や将来の志望の異なる三大学の学生が授業で混在し、多様な視点や価値観を交流して、一緒に学ぶ学修空間を創り出すことである。第三に、学生間の交流や討論、共同学修が進むよう学生参画型の授業を広げていくことである。

遠隔授業を継続しているうちに、いつの間にか「多様な視点や価値観の交流」「一緒に学ぶ学修空間の創出」「学生参画型の授業の拡張」といった理念が雲散霧消してしまう危機感を抱いている。

遠隔授業の導入によって、月曜日の稲盛記念会館は閑散としている。ひと気の消えた校舎は対面授業と遠隔授業のバランスの悪さを象徴している。京都三大学教養教育研究・推進機構のカリキュラムには、学生交流やアクティブ・ラーニングの舞台となるようなゼミナール型授業を十分に拡張できていないことが、コロナによって浮き彫りになった。共同化によって、科目選択幅の拡大は達成したが、「学生参画型の授業の拡張」という面では改善点も多い。平常時に、あやふやにしていた課題を、コロナは三大学に突きつけたのである。

4. 「2020年4月入学生」問題

ゼミナール型授業には、二つの役割がある。第一に、少人数で互いに切磋琢磨しながら、その学問分野を深める役割である。第二に、一人ひとりの顔と名前が一致する関係性の中で、教員と学生、学生と学生の間から生まれる相互的な学生支援の役割である。

変異株の波に繰り返し襲われ、その対応として導入した遠隔授業は、感染リスクのない独りの空間で授業を受けることを可能にした。その一方で、遠隔授業の大幅な導入は、気の合う友人を見つける機会を奪い、学生の孤立を招きがちである。

文部科学省が2021年3月に実施した調査によれば、入学当初からコロナの影響を受け続けた「2020年4月入学生」の46.3%が、学年末の3月になっても、学内の友人関係に「大いに悩んでいる(18.7%)」「少し悩んでいる(27.6%)」と回答している¹。この設問に関する学年別の平均値が29.1%からしても、「2020年4月入学生」の46.3%という数字は顕著に高い。彼らが2年次に進級した2021年4月から7月にかけても緊急事態宣言が発令され、遠隔授業が継続されたことから、「友人と思うように交流できない」という悩みは解消されないままだろう。

「2020年4月入学生」は入学後2年間、コロナに翻弄され続けた学年である。ゼミナールを担当する教員は、彼らに対して、可能な限り交流機会を作るべきだろう。著者も、感染状況が落ち着いていた2021年10月、11月に、大文字山ハイキングや紅葉ハイキング、授業で学習したマーケティングのセグメンテーションに関する実態調査とそのプレゼンテーションなど、教室外での学生交流の機会を例年以上に仕掛けた。この時期が唯一、「学生支援の全面展開」が可能な時期だった。

5. 大学・学年を超えた学生交流

2021年12月12日(日)、10時～13時、京都学・歴彩館で、京都三大学ファシリテーション研究会を開催した。リベラルアーツ・ゼミナールの受講生を中心に、三大学の学生が7名集まった。内訳は工繊大3名、府大1名、医大3名である。学年は3回生3名、2回生2名、1回生2名である。コロナ前は、授業の中で、三大学の学生が混在する形でグループを組み、「一義的な正解の存在しない問題について、学際的な視点で物事を考え、多様な見解をもつ他者との対話を通して自身の考えを深めていく経験」²を積むために、グループディスカッションを頻繁に行っていた。その取組に好印象を持っている3回生が、後輩の学生交流の機会を作るために、ファシリテーションを学ぶ場を企画してくれた。

ディスカッション教材はNHKスペシャル『彼女は安楽死を選んだ』である。全身の自由を奪われ寝たきりになる前に、スイスの安楽死団体に入会し死を遂げたいという神経難病を患う女性のドキュメンタリーである。置かれた環境によって様々な見え方がある「安楽死」をテーマにして、複眼的思考の大切さを学ぶことが目的である。このような多様な意見を語り合うワークショップこそ、三大学連携の柱である。

京都三大学ファシリテーション研究会



6. 遠隔授業への再切り替え

2022年1月現在、新しい変異株であるオミクロン株の感染拡大が続いている。報道によれば、オミクロン株は感染力は高いものの、その一方で重症化リスクは低いという見方もある。

2021年8月に感染拡大したデルタ株に比べて、はるかに大きな波が来ているにもかかわらず、その対応はどこか切迫感を欠いている。2022年1月14日現在、まん延防止等重点措置が適用されている都道府県は沖縄県、山口県、広島県の3県にとどまっている。他県でも急速な感染拡大が始まっているものの、政府へのまん延防止等重点措置の要請に至らない理由は、医療逼迫が起きていないからである。言い換えれば、まん延防止等重点措置および緊急事態宣言は、医療逼迫宣言である。つまり、どんなに新規感染者数が拡大しても、その多くが軽症にとどまり、医療が逼迫しないのであれば、まん延防止等重点措置は簡単には要請されない傾向にある。

入院を要するような重症化リスクは減ったとはいえ、著者は、2022年1月12日の段階で、1月の授業（第14、15回）を対面授業から遠隔授業へ切り替えることを受講生に連絡した。この判断は、まん延防止等重点措置が発令されることを待たずに行ったものであり、教員個人の裁量で遠隔授業への転換を行ったものである。京都府は1月14日、府内で新たに671人が新型コロナウイルスに感染したと発表した。671人という新規感染者数は1日あたりの感染者数で過去最多である。

変異株は感染力を高めながら変異する一方で、重症化リスクは低くなる。オミクロン株にも見られるこの特徴は、学校の意思決定において、まん延防止等重点措置の発令が従来のように参照基準として機能しなくなる転換点にあることを意味する。新規感染者数が拡大しても、重症者数が増えないのであれば、医療は逼迫しない。一方で、学校では、感染力を強めた変異株の登場によって、今まで以上に感染する学生が激増する。



7. オミクロンという転換点

NHK「特設サイト 新型コロナウイルス」には、2022年1月27日現在の「東京都 感染状況（年代別割合）」が示されている。その内訳は10代以下が22%、20代が29%、30代が18%、40代が14%、50代が9%、60代が4%、70代が3%、80代が2%である³。年代別割合でもっとも多いのは20代の29%である。第6波では子どもにも感染が広がっている。

京都府「新型コロナウイルス感染症対策サイト」によれば、2022年1月26日現在、確保病床使用率は45.4%で、高度重症病床使用率は19.6%である。入院者数（396名）を療養者数（11,996名）で割った入院率は3.3%である⁴。これらの数値からも、第5波までとは違い、第6波では重症者で医療が逼迫する状況には陥っていない。

第5波までであれば、感染者が急増すれば医療も逼迫してきた。つまり、新規感染者数と医療逼迫が連動していたのである。対面授業でゼミナールを実施したかった著者は、まん延防止等重点措置や緊急事態宣言を、「対面授業、遠隔授業の切り替えに関する参照基準」として注視しながら運営してきた。

京都府では26日に、1日2,216名の過去最多の感染者数を記録した。新規感染者数の急増に歯止めがかからない状況にある。その一方で、第5波までとは違い、第6波では重症化リスクは下がっていることは確かなようだ。感染症は感染力を高める一方で、重症化リスクを減らしながら変異する。新規感染者数は爆発的に増えながらも、入院を要する重症者数は少ない場合、大学はこの状況をどう理解するか。そして、4月以降、どのような授業実施方針を示していくか。このような新しい局面への向き合い方が大学に問われている。

8. 分かれる都道府県の対応

2022年1月17日（月）に、第14回目の授業を遠隔で行った。17日の段階では、京都府でも感染爆発の兆候が見られるものの、京都府は、まん延防止等重点措置を要請していない。一方、17日、東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県が政府に、まん延防止等重点措置を要請した。「変異株『オミクロン株』の猛威で社会経済活動が止まりかねないとの危機感に押され、消極姿勢からかじを切った東京都が、3県を先導する形になった」「海外や沖縄で鉄道や医療機関がストップして社会機能が停滞していることが伝えられ、都庁内の空気が変わった」⁵とのことである。

18日、午後7時過ぎに、岸田首相が1都12県（東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、群馬県、新潟県、岐阜県、愛知県、三重県、香川県、長崎県、熊本県、宮崎県）へ、まん延防止等重点措置の適用方針を表明した⁶。期間は1月21日から2月13日までである。

小学校、中学校、高校の動きは大学よりも早く、17日、大阪府教育委員会は「臨時休校している大阪府立高校が、17日現在、40校にのぼっていること」⁷を発表した。18日には、京都府と京都市の両教育委員会が「部活動について市立小中学校は原則中止、府立と市立の高校は2時間以内とする」⁸と発表した。

大学にはクラスルームも担任教員もなく、一人ひとりの時間割も異なるため、実際は学級閉鎖レベルの感染者数が発生していても、その実態が見えにくい。1月の第14回目、第15回目の授業について、大学はどのような対応をとるべきだったのか。感染爆発の中、1月の授業の実施方針を教員個人に委ね、組織としての判断を示さなかったことについては、いずれ、総括が必要だろう。

9. 日本を覆う強迫観念からの解放

人々の間に「コロナは忌避すべきもの」という強い思い込みがある以上、学校という場においても意思決定は自粛に傾斜する。この日本全体を巻き込んだ恐怖をともなう思い込みが緩和されない限り、社会のあらゆる面で、自粛が継続され自滅を招くだろう。ゼミナール型授業も例外ではない。

本章を執筆している2022年1月26日現在、日本全体で過去最多の71,633名の新規感染者が発生し収束の兆しはない。その一方で、従来とは違った動きも見られる。第一に、まん延防止等重点措置に関する都道府県の対応には差が生じており、関西でも隣接する奈良県、滋賀県、和歌山県はまん延防止等重点措置を26日現在要請していない。第二に、新型コロナウイルスワクチンの3回目接種が思うように進まない。「1月末までに約1,470万人が対象となっているが、実際に接種を終えたのは全国で約236万人で、接種率は24日時点で約16%」⁹にとどまっている。

「自粛要請」と「ワクチン接種」の両輪からなる日本のコロナ対策が、いま転機を迎えている。都道府県によって、まん延防止等重点措置への対応が分かれたことは、政策では感染拡大を抑えられないという行政の本音が見える。また、国民のワクチン接種率が80%に達していながらも、感染爆発に歯止めがきかない現実、ワクチンの感

染予防効果への期待が薄れている。

むしろ、喫緊の課題は、濃厚接触者の急増とその自宅待機による社会機能の停止である。

もはやコロナから逃げられないという諦念が著者の中ではふくらんでいる。第6波の感染爆発は、日本を覆ってきた「コロナは忌避すべきもの」という強迫観念から解放される機会になるだろうか。

10. 教養教育の成熟度を試す

本稿は、コロナの波に翻弄された教員の迷走記である。ゼミナール教育の目標は、一義的な正解の存在しない問いに向き合い、多事争論の気風をつくることである。コロナへの対応では、自分の考え方を絶対視しない「他者感覚」や「複眼的思考」が求められる。三大学のリベラルアーツ・ゼミナールはそのような学びの舞台である。

この混迷極まるコロナ禍の中で、京都三大学教養教育研究・推進機構の授業を、今後、どう再開していくのか。今こそ、学生、教員、職員が立場を超えて、当事者として、徹底的に話し合ったらどうか。感染症の素人である一人ひとりが、主権者意識をもって、臆することなく、社会や大学の在り方を語ることは、我々が実践してきた教養教育の成熟度を試すよい機会になるだろう。

¹ 文部科学省『新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査』2021年。

² 日本学術会議『回答 大学教育の分野別質保証の在り方について』2010年、30頁。

³ NHK「特設サイト 新型コロナウイルス」

⁴ 京都府「新型コロナウイルス感染症対策サイト」

⁵ 「都、慎重姿勢から一転 まん延防止 隣接3県と足並み」『読売新聞』2022年1月18日。

⁶ 「【速報】岸田首相 1都12県への『まん延防止』適用方針を表明」『TBS NEWS』2022年1月18日

⁷ 「大阪府立高の3割40校が休校、大阪市立小中は19校 感染確認で」『朝日新聞』2022年1月17日。

⁸ 「京都市立小中学は部活動中止 市立・府立高校は2時間以内」『京都新聞』2022年1月18日。

⁹ 「進まぬ3回目接種 今月末までの対象者のうち16% コロナワクチン」『朝日新聞』2022年1月27日。

(2)「モノ」に関わるゼミナールにおけるオンライン授業の難しさ克服策 (科目名:製品の機能から科学を学ぶ)

京都市立大学 学長特別補佐/生命環境科学研究科 教授

石田 昭人

1.はじめに

新型コロナウイルスのパンデミックにともない全国の大学は令和2年度開始から突然のオンライン講義を余儀なくされた。三大学においても各大学教職員の3月から4月にかけての文字通り不眠不休の努力によって、各大学の入学手続きと授業・実習開始になんとか漕ぎ着けたわけである。しかし、通常講義はともかく、共同化教養教育の看板でもあり対面での議論を当然の前提としてきたリベラルアーツゼミナール科目については、我々担当教員にとって全く想定外の事態であっただけに、一体どうやって進めればよいのか、まさに手探りであった。もちろん、最も途方にくれていたのは夢にまで見た大学に入学できたものの、登校すら不可能な状況に直面した学生達であろう。本稿はそんな学生達を少しでも励ますことも視野に入れて、ゼミナールをなんとか実施した苦闘の記録とでも言うべきものである。今後、このような事態が再び起きてもらっては困るが、ゼミナールでは通常の講義よりも良きにつけ悪しきにつけオンラインやオンデマンドの特徴が出やすいこともあり、この経験が各大学で教育に当たっておられる先生方の講義や実習のお役に少しでも立てば幸いである。

2.科目の趣旨

私の担当科目であるリベラルアーツゼミナール「製品の機能から科学を学ぶ」では

- ・身近な製品の材料と機能を知ること、科学全般の知識を身につける
- ・パーソナルワークとグループワークを組み合わせ、相乗させることで、個人の能力を涵養するだけでなく、協働する能力を身につける
- ・大学生としての基本スキルを涵養するだけでなく、専門で活かせるスキルを身につける

ことを目的としている。とくに、グループワークでは、パーソナルワークでそれぞれ見つけた魅

力ある対象の中から議論によって選抜した1つの対象について、その具体化にグループ全体で協力して挑戦することを趣旨としている。

このグループワークでは、

- ・仕事を適切に分割し、役割を効果的に分担する
- ・責任を自覚して自らの役割を果たし、また、メンバーに果たさせる
- ・状況に応じて議論を主導し、聞き役に回り、議論を成熟させる
- ・具体化に必要な追加情報や物品を調達する
- ・作業の工程表を作成し、進行状況を判断しつつ、締切までに完成させる
- ・成果を第三者にアピールできるようなプレゼンテーションを行う

これらをこなしていかなければならない。主体はもちろん学生達であり、私はあくまで補助・助言役に徹することを心掛けている。ゼミナール科目を履修する学生は概してモチベーションが高いうえに社交的であるが、もちろん温度差能力差はある。個々の学生の特性を見極めてグループ内での位置づけをどのように調整して能力を向上させてやるかは、ひとえに教員の関わり方次第であり、非常に難しいが、これこそがゼミナールを担当する醍醐味でもある。

さて、ここまでお読みいただければ、突然降りかかってきたオンラインやオンデマンドが、どれほどの困難をもたらせたかは容易に御想像いただろう。グループの空気を読みながら、学生達に語りかけ、その表情を見てグループ全体と個々の学生に助言し、熱意を喚起していくという、ゼミナールにおいて最も重要なことが全く出来なくなってしまったのである。しかし、当然と思っていた大前提が崩れて否応無しに別の大前提を立てられたからには、それに対応する以外にない。

3. 令和2年度の対応

令和2年度はとにかく大学全体が大混乱で、工織大のご厚意によってNextCloudを提供していただいたものの、三大学の情報環境がそれぞれバラバラであったため、共同化教養教育の授業は「オンデマンド」で実施せざるを得なかった。しかし、当然ながら、ゼミナール科目で単に文書ファイルを配布するなどあり得ない。私の科目では、材料に関する知識をつけてもらうきっかけとなる短い講義を毎回行ってきたので、それをなるべく細かく丁寧に行うこととして、テキストを作り、解説を録音して音声データとして配布することにした。しかし、ゼミナールで最も重要なのももちろん学生同士の交流である。そこで、お互いを知るために「名刺」を作ることを最初の課題とし、共有フォルダにアップロードしてもらった。府立大学生だけはMS Teamsが使えるものの、ビデオ映像さえも使えなかったので、写真や似顔絵があれば少なくともお互いの雰囲気を知ることができる。とくに、オンラインが使えなかった医大や工織大の学生には、それぞれ将来様々なクライアントと関わる時のことを想定して対象に応じた複数のデザインを考えさせ、添削指導した。名刺というごく限られたものであっても、要所をちょっと添削してやるだけで格段によくなることを学生達に実感してもらえたことは学生達からの返答で実感できた。そこで次に自己紹介の音声データを作ってもらい、共有した。これらでお互いを最低限知ることはできたであろうが、後述するグループワークではさぞかし困惑したろうと思う。

最も困ったのは、三大学の情報環境の差のためにオンラインでリアルタイムに直接やりとりすることが府立大学の学生以外ほぼ不可能だったことである。その府立大学の学生達とのやりとりも、音声だけに限定されていたが、少なくとも、何も無いよりはマシであろう。そこで、不公平になることは承知で、府立大学の学生とだけは講義時

間にMS Teamsによるオンラインのやりとりを行うこととした。そして、府立大学の学生をコアにして、工織大と医大の学生を含めたグループを作り、グループワークを行うことにした。残念ながら、この状況下では到底具体化まではいけそうも無いので、興味のある対象をグループでそれぞれ選んでもらい、それについての調査と、それをまとめた台詞付のパワーポイントファイルを作ってもらい発表会の代わりにアップロードしてもらった。グループはなるべく所属大学・学部・学科の偏りのないように構成した。学生達はLINEを使って議論し、発表のストーリーと構成を考え、それぞれ分担したページを作成して台詞を入れ、1つにまとめたわけである。発表ファイルはそれぞれ十分な出来で、全く見も知らない相手とオンラインだけでよくここまでやったものだと感じさせられた。大学生として外では何も出来ない中、数少ない自主的で建設的な学習の機会であったからかもしれない。学生達には随分と不便を掛けたが、大学生らしいことを多少なりとも体験させてやれたという意味はあったように思われる。

4. 令和3年度の対応

令和3年度については2年度の経験があったことと、部分的な対面が可能になったことで格段に運営が楽になると同時に、教員学生双方で教育効果が強く実感できた。なんとか「ゼミナール」らしい形になったといえる。一方で、対面が部分的に実現できたことによる新たな問題も明らかになった。対面授業とオンライン授業が混在した場合、次の授業に大きな支障を来すのである。特に共同化講義はキャンパスが異なるので、所属大学の対面講義と連続する場合、学生は対応できなくなってしまふ。オンライン講義であっても、キャンパスが異なれば受信環境が異なるため、次の授業までに接続を完了するには冷や汗をかくことも少なくない。こういったことは学生の側にしかわからないことで、前日の夜などに急に予定を変更

して学生に大きな迷惑を掛けてしまい、学生からの連絡で初めて気づいて反省することしきりであった。

対面の意義と効果であるが、一度でも対面で議論した経験があれば、後はオンラインでも十分に意思の疎通が図れることがわかった。「実際に顔を合わせて話し合った経験」というものがそれほどまでに重要であることを教員学生ともに改めて認識させられた。この効果はオンラインにおける「顔出し」では十分に得られないようである。オンラインの限界はおそらくここにあるのであろう。ことゼミナールに関しては最初からオンライン会議だけでは決して代替できないことに十分留意する必要がある。相変わらずオンライン講義が大半を占める中、このゼミナールで対面のグループ議論や具体化作業を体験できた学生達の喜びはひとしおであった。

具体化課題について少し触れておくと、このゼミナールでは、パーソナルワークによる調査活動で見つけた興味深い対象の中からグループワークで具体化に取り組む対象を議論して選ぶことにしている。今年はキーワードにSDGsを選び、具体的な対象としてLIMEXという炭酸カルシウムを主材とするポリマー材料を選んだ。そこで、このLIMEXを使って、三大学の学生が日常的に使い、大学生活の利便性を向上できる製品を考えようということになった。出て来た製品のアイデアは

- ・ 再利用可能なテイクアウト専用食器
- ・ 授業や下宿で使える携帯・タブレットスタンド
- ・ 傘

の3つであり、4グループに分かれて（傘は2グループ）、具体化に挑戦した。

具体化に当たっては、先例、素材、製造工程、価格・経費 etc といった調査を行い、それに基づいてデザインを考え、試作し、さらに、実際に製品化するにあたっての採算面の見通しもつけなければならない。これらを学生達はグループ内で分

担して、その成果を対面で発表したわけである。

学生達の意気込みと熱中ぶりは私や三大学事務スタッフが感心させられるほどで、オンライン主体の重苦しい状況に置かれているだけに、まさに水を得た魚という感じであった。特筆すべきは、三大学の学生達が、それぞれの専門分野の視点を活かして協働したことである。互いに教え学ぶことで、個人では決して得られなかった知識と発想の広がり身につけてもらえたと思う。このゼミナールを将来の専門につなげるということを強く意識してきただけに、大きな喜びを感じた次第である。

最後に行った対面のグループ発表会では、当日参加できなかったメンバー1人が対面登壇者に引き続いて途中からオンラインでプレゼンしたが、繋がりが非常にスムーズで、まさにマイクを渡す感覚であった。質疑応答にもごく自然に行うことができた。発表練習はオンラインでやっていたらしく、力を合わせてこのコロナ下の教育環境に的確に対応した学生達の逞しさを感じた。我々教員も見習わなければならないだろう。

なお、このゼミナールに対する学生達の感想は以下である。

- ・ オンライン授業が多かったが対面授業を強行してほしかった。
- ・ 述べられる授業の予定が二転三転したり、急遽次回が発表と知らされるといったことがあったので、このコロナ禍で先行きが不透明な状況で難しいことだとは思いますが、全体計画に変更があった場合には速やかにお知らせしていただきたいです。
- ・ これから授業全体として何をするのか、期限はいつかなどの重要な情報が伝えられていないので、そのあたり明確に伝えてほしい。
- ・ 最後のプレゼンの準備期間がもう少しあれば余裕をもって準備ができたと思う。
- ・ プレゼンするスキルを実際に多くのプレゼンを経験しておられる先生から教わり、モチベーションの高い同級生と一緒に課題をこなせたこ

第2部 共同化科目の授業研究

(2)「モノ」に関わるゼミナールにおけるオンライン授業の難しさと克服策（科目名：製品の機能から科学を学ぶ）

とは自分にとっていい経験になった。

- ・ 大学に入って一番面白い授業だった。主体的に授業に参加する必要があり実用的なスキルを身につけられただけでなく幅広い知識も得られた。
- ・ 後半、対面で話し合いを行えたのはとても有意義だった。
- ・ 普段使っているような製品の素材に関する知識をつけつつ、これからも使えるようなプレゼンテーションのスキルも身につけることができ、さらに他校の方々と自由に課題に取り組むことができるなど、さまざまな経験ができた。
- ・ ディスカッションやプレゼン能力、一般教養などいろいろ学べた。
- ・ グループで課題に取り組むため基本自分たちの行動次第だが、授業内容や人生について役立つような情報を頻繁に発信して教えてくださった。

このような過分の感想を学生達からいただくことができ、教員冥利に尽きる。このゼミナール科目を担当して本当によかったと思う。

参考までに、本ゼミナールの受講生 28 名が議論してまとめてくれたオンライン講義の全体的な特徴を以下に示す。

1. メリット

- ・ 家で受講できる
- ・ 気兼ねなく一旦席を外してまた戻れる
- ・ 忘れ物で困ることがない
- ・ 自分でその場で調べながら受講できるから理解度が高くなる
対面出席でわざわざ PC を開けているのはこれが理由
とくに、資料のディテールが重要な建築美術系の講義の場合は非常にありがたい
- ・ オンデマンドの場合は受講時間をずらせる

2. デメリット

- ・ だらける

- ・ 課題がやたら多い（それぞれの科目ではリズナブルでも、全科目が集積すると雪だるまに）
- ・ 対面が部分的に混ざると非常に困る
時間割の設定をちゃんと考えてほしい
直前の変更、いきなり対面とかオンラインとかは本当にやめてほしい
- ・ 画面を見ていると酔ってくる
教員は 90 分で気にならないのだろうが、学生は丸一日連続なので相当辛い
- ・ 受信環境の影響を強く受ける
教員は受講者の受信環境が平等ではないことを常に意識してほしい
一旦トラブルと自分では対応できないことが多い
最悪、授業に戻れなくなったり、戻れても授業が進んでわからなくなる
- ・ 三大学のアカウントも大学のアカウントにしてほしい
- ・ 質問しにくい
全員に丸見え丸聞こえになってしまう
対面のように授業が終わってからちょっと質問、ということができない
- ・ グループワークがうまくいかない
表情がわからないのが一番痛い → 顔出しはマスト！
対面で知り合っていればスムーズに行く
- ・ 対面の発表とオンラインの発表では体験効果が全然違う

いずれも納得できて身につまされる話ばかりで、学生達の苦勞がよくわかった。オンラインと対面のギャップを我々がどのように埋めていけるのかを具体的に考えて実施していかなければならない。情報環境が異なると困るのは学生はもちろん我々教員にとっても同じであり、部分的にでもなんとか moodle で共通化できないかと思う。

(3) 「レーザーで測る、創る、楽しむ」2021年度報告

京都三大学教養教育研究・推進機構 非常勤講師
播磨弘

【授業目的】 Moodle、およびシラバスで学生に目的について次のように告げている：

1. レーザーについて、開発の歴史や動作原理などの基礎知識を得る、
2. 情報通信、加工・製造、医療・美容、娯楽、軍事などの幅広い分野でのレーザーの活用、および将来の発展方向について知る、
3. ゼミ形式の授業に親しむこと。具体的には、自分で調べた内容について人前で発表すること、および他人の発表を聴いて、積極的に質問や意見を述べる。

【授業の進め方】今年度の授業は以下の要領で進めた：

1. 授業回数の最初の1/3（5回分）で教員による要点の講義を行った。その内容に関して学生に課題を示し、レポートを書かせた。
2. 残り2/3（10回分）で毎回3名ずつ、合計30名の受講生全員が与えられた課題テーマについて発表させた。一人あたりの持ち時間は25分で、これには10分程度の質疑応答の時間を含む。
3. 教員は発表課題（40件程度）を授業のスタート時に提案し、第4回目の講義終了後に学生に好きな発表課題を選択させた。各学生に希望課題を2件ずつ、時間を決めてメールで先着順に受け付けたところ、ほとんどの学生については第1希望で、数名については第2希望までで希望課題が選択できた。
4. 学生にはPowerPointなどで発表用資料を作成させた。発表用資料の作成要領については細かくガイダンスした：発表内容の起承転結、

文字や図の表現法、動画資料の取り込み方など。

5. 発表予定学生には、発表3日前までに発表用資料を作り、教員にメール送付させた。資料は1発表あたりPowerPoint画面で10枚前後が平均。教員は当日の3名分の発表資料が集まり次第、縮小画像データとして加工のうえ、NextCloud上にアップロードし、授業時までに受講生が自由に閲覧できるよう準備を済ませておいた。事前にその資料に目を通しておくように指示したが、そうした学生は少なかった模様である。
6. 出席状況について。最初の3回を除く12回分の授業日の出席点を成績評価に加えた。最初の3回分は受講生名簿が未確定のため評点に加えなかった。出席状況は良好で、欠席者数は平均すると1授業回あたり0.8名程度であった。無断欠席は皆無で、欠席者はみな事前にメールで欠席予定を知らせてきた。前後の時間で受講する演習系科目との時間調整が難しいため欠席すると申し出た上級生が数名いた。

【受講生の内訳】

- ・所属先別では京都府立大学5名、京都工芸繊維大学24名、京都府立医科大学1名。学年別では、1年生19名、2年生9名、3年生1名、4年生1名であった。過去と比較してやや2年生以上の比率が高い。

【成績評価】

1. 定期試験は行わず、成績は（1）レポート6点（最初の5回分の講義に関し）、（2）出席点24点（=2点×授業日12回）、（3）学生の発表（70点）の合計100点満点で評価した。

2. 上記(3)の配点(70点)が比較的大きいが、これには、本人の発表内容(50点)に加えて、他人の発表に対する関心度(20点)を評価している。具体的に後者では、他人の発表に関して意味深い質問や意見を発した回数を記録して評価した。
3. 結果として、受講生30名の成績は平均で70点台半ばで、これは例年と大差なかった。また、大学間や学年による成績の差異は特に見られなかった。

【授業を終えた感想】

1. リモート同時配信による課題発表は、特に入学直後の1年生にとっては多くの技術的困難を伴うのではと事前予想し、色々な対策を準備していたが、実際にはそれは杞憂に終わり、Wi-Fi環境や利用デバイスなどの環境要因による不都合はほとんど感じられなかった。つまりPowerPointなどを使ったリモート発表や、学生間、および学生・教員間の意見交換では、司会者(教員)が画面でモニターする全受講生30名の反応を注意深く観察することさえできたら、対面授業と似た効率で進める事ができるとの自信を得た。

なお今年度に限る事情かも知れないが、コロナ禍で1年生と上級生との間で授業時間割に10分のズレが生じていて、本授業のように比較的多人数の上級生(1/3)を抱えた授業ではこの影響が少なからずあった。
2. リモート授業ではゼミナール授業の利点、つまり対面による双方向の意見交換ならではの緊張感や臨場感を受講生に体感させられなかったのではという懸念が最後まであった。しかし、授業終了後の大学集計アンケート結果にて「教員との双方向のやりとりがあり、

授業に参加しているという実感があった」との選択項目を選ぶ比率がかなり高かった(工織大回答者14名中の12名)ことを見ると、ゼミ方式のメリットは一定程度、確保できたかも知れない。

3. レーザーが縁遠い対象と思われる多くの受講生に向けた工夫として、この授業では年ごとにレーザーの応用分野での発表課題の提案を増やしている。例えば今年度はドローン搭載レーザー、スマホのレーザー顔認証、細菌・ウイルスのレーザー滅菌などを採り上げた。これは受講生にはおおむね好評であったが、一方で、調べてもまとまったネット情報が得られないとの苦情相談も受けた。教科書的な情報を見つけやすい基礎的課題と、このような新しい話題との情報ギャップをどう埋めるか、助力方法について今後、さらに工夫したい。

【大学間交流の観点から、最後に】

1. この授業では個人発表を中心としているため、混成チームによるグループ発表のように意図的に大学間交流を促進させる形はとっていない。ただ、この授業ではひとりの学生の発表に対して大学間の垣根を全く感じさせずに皆が自由に質問しあえているので、これも大学間交流のひとつと言えなくもないと感じている。
2. グループ発表に踏み込めない理由として、受講生の多くが入学直後で学生間の面識が薄く、さらに今は学生間の直接接触機会が限定されがちな事情もある。また、現行の個人的な学習や発表機会には入学後の早い時期から慣れてほしいという教員側の個人的希望もある。もっとうまいやり方はないか、今後も更なる工夫を考えて行きたい。

(4) 三大学教養教育共同化へのこれまでの関わり：その2 (科目名：生物学的人間学 ほか)

京都府立医科大学大学院 神経発生生物学／医学科 生物学教室 教授
小野 勝彦

はじめに

私は2015年4月より「生物学的人間学」を担当し、これに加えて教室からはリレー講義の一員として、「生命科学講話(小野と野村)」、「現代社会とジェンダー(小野から野村へ)」、「意外と知らない植物の世界(後藤)」にも参加してきた。本来は、科目担当者としての報告書とすべきであるが、後述するように一通りの任を終えたことから、これまでの関わりについて総括の意味を含めて記したい。なお、報告書に寄稿するのは2回目であることから⁽¹⁾、表記のようなタイトルとした。

科目担当者として

「生物学的人間学」では、細胞や人体の仕組みについて、「普通に耳にする内容をとっかかりに」紹介してきた。受講生数は毎年120人から100人の間であった。講義形式は、スライドを用いたいわゆる座学講義であり、15回のうち2-3回を学生同士の討論の時間としてきた。2019年以前については、前回の報告書を参考にしていたきたい⁽¹⁾。

2020年1月に始まった新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のパンデミックにより、共同化授業はすべてオンライン授業となった。医大では、オンライン授業はZoomを用いて双方向性を担保しているが、共同化授業では原則としてオンデマンド型の配信となった。パワーポイントスライドに解説の音声を入れたものをそのまま、もしくはmp4形式の動画に変換して配信した。本科目は基本的に座学の授業ということもあり、講義内容を変えることなくスライド化することができた。講義後の小テストをGoogle formを用いることで、質問を受け取りメールで回答することにより双方向性を維持した。質問をする学生の数は最大でも2割くらいで、回答する手間はあまりかからなかった。ただ、毎回の欠席者のチェッ

クは、Google formの提出者から差し引いて転記するため、少し時間を取られた。

2020年度はすべての講義をオンデマンドの配信としたが、2021年度では、1回だけではあるがZoomを用いた双方向性の授業を行うことができた(後藤が担当)。この時には、3-4割の学生がZoom授業に参加し、残りの学生にはオンデマンドの別メニューを配信した。参加した学生の一部からは、双方向型授業による、学生間、学生と教員間のやり取りが楽しかったという声があった。

我々教員も、多くの会議やセミナーがZoomを紹介するものや、オンデマンド動画の配信となった。この経験をもとに考えると、オンライン授業は、集中して視聴すると、対面授業と比べて終わった後の疲労感が大きいのではないかと感じる。このため、授業時間は90分であるが、可能な限り60~70分で動画を終わるようにしている(Zoom授業では途中で休憩時間を入れるとか)。

2021年度の授業では、府立大学の文学部や公共政策学部の学生も受講しており、前回の報告書に書いた文系の学生の受講が少し進んだ。

「現代社会とジェンダー」と「意外と知らない植物の世界」は、文系および理系の教員のリレー講義による学際的科目である。前者は府立大学で以前からあった科目に生物学的な内容を加えたものを2015年から始め、後者は2015年に新たに立ち上げた科目である。

7年間にわたって「生物学的人間学」と「現代社会とジェンダー」(15回のうち2回)を小野が担当してきた。しかし教員生活も第4コーナーを過ぎたことから、後者は今年度から、前者は来年度から、同じ教室の野村准教授と交代することになった。「現代社会とジェンダー」では、講義終了後に担当した数名の教員のうち1名の内容についてレポートを作成して提出することとなっているが、野村准教授になって(小野の頃より)レポート数がうんと増えたということで、学生の

興味をより引き付ける授業となったものと思われる。来年度からの新生「生物学的人間学」では、人体の発生や進化の仕組みに加えてヒトと環境との相互作用を『人新生』の視点から解説していくとあり、時代をとらえての講義となるものと思われる。手前みそ的ではあるが、うまく次世代にバトンを渡しつつあると思っている。

運営委員会のメンバーとして

さて、私は科目担当者としてのみならず、2013-2014年度と2017-2020年度には医大医学科の教養教育部長としても、共同化授業にもかかわってきた。この立場での関わりについても、本報告書の意図とは離れるが、一言述べさせてもらいたい。

2014年8月に医大の花園学舎が下鴨キャンパスの稲盛記念会館に移転して、その年度の後期から共同化授業が本格的に開始された。この年には後期から始まったこともあり、医大生の受講数は限定的であり、この点が各方面から指摘され、当時の教養教育部長は非難の矢面に立った。当時は、「いい講義であることがわかれば、次第に受講生は増えると思うので待ってほしい」という他なかった。機構から内々に、医大医学科の人文科学・社会科学の講義をなくしてすべてを共同化授業で代替するように言われて怒りまくったこともある。

年度別 三大学教養教育共同化科目の医学科履修登録者数

	年度計			前期			後期		
	合計	医学科	看護学科	合計	医学科	看護学科	合計	医学科	看護学科
2014	425	357	68	272	214	58	153	143	10
2015	534	365	169	422	258	164	112	107	5
2016	639	377	262	520	289	231	119	88	31
2017	695	388	307	589	306	283	106	82	24
2018	748	417	331	593	275	318	155	142	13
2019	827	540	287	628	376	252	199	164	35
2020	833	511	322	554	319	235	279	192	87
2021	781	439	342	595	313	282	186	126	60

上の表は、2014年から2021年に至る医大生の共同化授業受講の延べ人数を示している。この表から、医大生の受講延べ人数は順調に伸びてお

り、特に医学科では2018年からの大きく伸びていることがわかる。この年からは、新入生オリエンテーションに上回生に来てもらい、おすすめの三大学共同化授業を面白おかしく、ただし真面目に紹介してもらうことを始めた。特に2019年には、非常にユニークな上回生の紹介があり、これが一気に100人の増加につながったものと考えている。コロナ禍では、対面のオリエンテーションの時間が限られており、このため、文章で紹介する方法に切り替えた。対面と比べて効果はいかほどか不明ではあるが、一定の受講生の数は維持できている。上回生からのおすすめ講義は、正規のオリエンテーションだけでなく口コミなどでも続いてほしいと思っている。

終わりに

近年、大学においては教育改革が必須の課題となっている。いずれの大学も、機関別認証評価や、また医大では分野別認証評価を定期的に受けて、その結果を教育システムに反映されることが求められている。また、これまでの前後期制から、四学期制を導入する大学が増えている。加えて、医学部においては専門教育の早期化は1990年代から始まっており、最近ではこれも加速化されている感がある。これらの事柄は共同化推進において大学間でconflictする一因となっている。一方で、ナラティブな感覚ではあるが、医大のとりわけ学習意欲の高い学生からは、多様な科目が学べる共同化授業に対する評価は非常に高い。共同化授業が、学生の意欲に沿い、あわせて各大学の改革にも歩調を合わせることができるよう、関係する教職員の方々には、柔軟で大胆な制度設計・すり合わせ進めてもらいたい。

(1) 京都三大学教養教育共同化事業 平成30年度報告書 (<http://kyoto3univ.jp/wp-content/uploads/2019/03/82e9a3bedba6df61c136643e25a5a7df.pdf>) pp.30-32

(5) 三大学共同化科目「現代京都論」を担当して

京都府立大学 非常勤講師／一級建築士事務所 スーク創生事務所 代表

大島 祥子

授業の内容と進め方

2016年度から「現代京都論」を担当している。私はこれまで社会活動等で学生さんと活動をとものにすることが多く、その度に「せっかく京都で学んでいるのに京都のことを知らない、あるいは関心を持たない学生さんがいるのはもったいない」と思っていた。そこで、京都の様々な事象について理由と因果があること、そして今あるものの背景にあるものを推測する（仮説を立てる）素材を提供し、まちを歩くのが楽しくなるようなテーマを採用してカリキュラムを組んでいる。

さらに三大学共同科目は、専門性が高い大学・学部の学生が同じ教室で同じ授業を受けるというもの。同じ事象でも専門分野や関心の領域が異なることで見え方が変わるかもしれない。この差を浮き彫りにすることで学際的な学びの場の良さを生かせるのではないかと考え、三大学の目的の一つでもある価値観の交流に力を入れようと考えた。

ところが、この授業は大教室授業。定員も参加人数も多い。定員は196名に設定されているが、初めて授業を担当した2016年は204名。2019年には293人にまで膨らみ、出席率も非常に高い（毎回90～95%）。この中でどのように交流を行うか。そこで考えたのは、各回のテーマに関する感想や質問を提出してもらい、翌日にそれを紹介し、質問には答える時間を設けた。感想や質問を書く際は「それぞれの専攻や興味のある領域から考えてみて」と注文を出した。景観の話では応用化学の観点から素材を活用した課題解決の提案があったり、空き家の話では地域医療に関する夢が寄せられたりした。これらを授業の冒頭で紹介することを通じて、この教室には多様な専門と価値観の人が一緒に居る、ということを実感してもらえるよう工夫をした。そしてシートに書かれた内容から、各回のテーマについて「いかに自分ごととして捉え、思考を巡らせたか」を1～5点で評価し、これらを「授業参加姿勢点」として

評価の40%を占めることとした。

そう、大人数の授業でこれをするには準備作業が膨大である。毎回A4サイズのシートが2センチほど積み上がる。それを持って帰路の途中にある喫茶店に入り、珈琲が冷め切るまで確認し、評点を記入する。さらにExcelで用意している評点シートに学生ごとに点を入力し、特徴的なコメントを転記する。授業日である月曜日の夕方までに評点を終わらせ、日付が変わるまでに次回授業の準備とExcelへの入力を終わらせる、というルーチンで進めた。知人には「よくやるよ」と言われているが、実はこれは受講生の個性を理解する上で有効な手段であり、成長の記録でもある。「いつもユニークなコメントを書く彼女、相変わらず視点が鋭いわ」や「彼は京都に無関心だったけど興味がわいてきたようだ（しめしめ）」と姿勢の変化もうかがえる。次第に「このテーマ、彼女ならどう感じるだろう」と感想を楽しみにするようになるのである。

新型コロナ禍での授業

大人数の授業であるので、受講生の通信環境や情報インフラを考慮すると、オンデマンド以外の選択肢はなかった。オンデマンド授業になっても、授業の進め方はこれまでのスタイルを踏襲した。パワーポイントの資料を音声付きで録画してYouTubeに限定公開し、そのアドレスを受講生に伝える。スマホで受講する人に考慮してQRコードも用意。授業の感想や質問はGooglefoamに各回準備した。

Googlefoamでは感想と質問を記載するフォームに加え、数回に一度は互いに元気づけるため「今感じていることを川柳で」を募り、寄せられた内容を別紙で整理して共有したりした。他には「京都の好きな景観は?」「身近にある伝統産品は?」「京都のオススメスポット」などを紹介してもらい、授業資料とともに共有して価値観と情報の交流づくりを試行錯誤した。2020年

度はこの仕組みを設定し、運用するだけで瞬く間に月日が過ぎていった。

2021年度は、映像資料は前年度の映像をベースに修正・更新項目を入替え、さらに板書ができない代わりに重要な項目や脱線して資料にないものはテロップを入れて再編集した。時事を扱うテーマが多いので、項目や資料の更新として少なからず入替が必要であった。おかげで私も映像編集技術が身についた。各回の映像は60～80分と長いため、油断して「後で観よう」とため込むと大変なことになるので「視聴期間は2週間。感想と質問は授業日中に寄せられたもののみ次回に取り上げる」というルールを設定した。受講生としては自分の感想や質問を取り上げて欲しい人が少なくなく、半数以上が授業日中にGooglefoamを通じて寄せてくれた。

さらに「直接やりとりする、そして相互に顔が見える機会も欲しいな」と考え、zoomによる質問会を2回設定した。しかしながら参加者はのべ3人と寂しい会に終わってしまった。オンデマンドはオンデマンド、という割り切りがあるのだろうか。

オンデマンド授業の良かった点

既に他の先生も指摘されていると思うが、学生さんのオンデマンド授業への評価は悪くない。リピート再生や繰り返し視聴できる点が大きいようだ。実際、YouTubeの再生回数を見ると300～400回再生されている。もちろん「本当に視聴したのか？」と思うような感想や質問が寄せられることもある。中には「倍速で見ました」とさすがデジタルネイティブ！と思う強者もいた。

対面授業の際は、大教室の授業であるため、私語が問題になることがあった。「私語は他者の授業の妨害になる」と厳しく対処したのだが、特に教室の後方の私語には気づかないこともあり、授業の感想シートに「私語がうるさい」と指摘されることがあった。しかしオンデマンドは授業を受

ける環境を自ら選ぶことができる。この点は利点であると思う。

Googlefoamで感想や質問を収集するのは、蓄積や整理の点で大いに効率的だった。Excelベースで編集ができるので入力が極めて省力化できた。さらに受講生も筆記具より書きやすいのだろう、毎回500字前後の感想を寄せる学生も複数いて、授業の内容に加え、独自のリサーチ、例えば自分が住んでいる住宅の用途地域や景観規制を調べたり、自分の経験を授業内容に関連させて紹介したり、内容の充実化が見られた。私にとっては毎週膨大な読み物が与えられたのだが、手書き文字よりは随分と読みやすい。全ての回の履歴を容易に残せるのも良い。

対面・オンデマンド授業を経験し、さらに担当者会議に参加した感想

過日開催された「共同化科目担当者会議」にはじめて参加させていただいた。支えておられる先生方の熱意に触れ、改めて三大学共同化科目の意義について考えることができた得がたい機会であった。当日、他の先生もご指摘されていたが、少人数のゼミナール形式では多様な関心や専門を持つ学生さんの交流を行うには、他大学では得られない貴重な学びの場になることが期待できる。しかし大教室の授業では、横の繋がりや交流へと導くには課題が多い。匿名での価値観の共有にならざるを得ない。現在はこの点を課題に感じている。

2022年度も現段階ではオンデマンド授業になるかもしれない。対面とオンデマンド両方の良いところ、課題となるところが見えてきた今、どのような形態で、どのようなツールを取り入れてこの課題を解決していこうか。多くの先生の知見を頂戴しながら取り組んでいきたい。

(6) これまでの、そしてコロナ禍を受けた授業の様子 (科目名：フランス語圏の文化とジャポニスム)

京都工芸繊維大学 准教授
吉川 順子

授業のねらい

この科目は2017年から、2年次以上を対象に開講しています。受講生は必ずしもフランス語学習者ではないため、言語ではなく文化に比重を置いた内容にしています。また、単にフランス文化を学ぶのではなく、両国の文化交流史、具体的には「ジャポニスム」を軸に、異文化交流の意義や諸問題まで考察することをねらいとしています。

ジャポニスムとは、19世紀後半から20世紀初頭の欧米諸国で日本文化の影響を受けて展開された芸術運動（また、その裾野となった大衆的な日本趣味の流行も含む）のことで、フランスはその先進国でした。半世紀に亘って日本文化が欧米の芸術作品の着想源となったにもかかわらず、高校までの学習では余り詳しく取り上げられませんが、近年は研究の進展と共にジャポニスム関連のイベントや展覧会が増え、何らかの知識を持ち合わせている受講生も増えてきました。

このジャポニスム、すなわち日本文化の受容によって創造された作品の数々を、その背景にも目を配って学ぶことで、フランス（フランス語圏、欧米諸国も射程に入れて）および日本の文化芸術に関する基礎的な知識を身につけることも目指しています。一例を挙げると、浮世絵に影響を受けた印象派絵画であれば、印象派以前のフランス絵画の規範にも、和歌の翻訳であれば、日本の歌集の特徴にも視野を広げていきます。

学部生向けの教養科目ですので、美術・文学・音楽など様々なジャンルを取り上げ、まだ馴染みのない舞台芸術にも触れてもらいたいと思っています。例えば、日本を題材にしたオペラ《蝶々夫人》や、早くに英訳が出た人形浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』（今も花見小路を歩けば赤壁が目に入る、祇園一力茶屋の段）などの鑑賞を行っています。

葛飾北斎の《富嶽三十六景》がスコアの表紙に使われたクロード・ドビュッシーの交響詩《海》であれば、大学オケで演奏したという受講生もいました。欧米の大学生なら当然知っているマルセル・ブルーストの長編小説『失われた時を求めて』の無意志的記憶の挿話に、日本の水中花が登場することも聞きかじっておいてほしいことです。

授業の実施方法

一人1回のプレゼンテーションを課しているため、比較的少人数で実施しています。これまでの受講生数は、16名（2017）、11名（2018）、15名（2019）、24名（2020）、19名（2021）でした。

授業では毎回、講義の後にグループワークを行います。内容は、一つのテーマについて自由に意見交換する／グループで議論した結果を発表する／異なる資料を読んで説明し合う／作品や翻訳を分析する／講義の要点を文章に纏める／作品の鑑賞を楽しむ、などです。飽きないように緩急をつけていますが、得意な作業で力を発揮し、苦手な作業は他の受講生のやり方を見て学ぶ機会になればとも考えています。また、大学や専門が異なる人と出会えるように毎回グループのメンバーを変えています。これは、学期の終わりにプレゼンテーションの聴衆となるクラスメイトと一度でも接点を持ち、登壇へのハードルを下げる意図もありましたが、その心配には及ばず、ほとんどの受講生が堂々と発表できていました。

プレゼンテーションは一人10分程度です。テーマは「日本の文化が他国でどのように知られているか」に関するものであれば幅広く受け入れ、特に自分の関心や専門に結び付けて設定するよう促しています。これによって、まだ慣れない発表準備を積極的に行ってもらい、ここで深めた知識が

後に何かに結びついていくことも願っています。

評価に関わる点として求めているのは、プレゼンテーションの冒頭で「なぜそのテーマを選んだのか」、結びで「この調査によって何を学んだか」を明確に述べること、そして(インターネットを使った調査も認めています)少なくとも一冊は書籍を紐解くことです。その他、テーマの独創性、全体の作業の丁寧さ、考察の深さを見ていますが、概して興味深い内容で、パワーポイントも教員よりはるかに綺麗に作れています。

プレゼンテーションの作法をある程度心得ている受講生は、タイトルの付け方も的確です。例えば、「現代フランスにおける日本のサブカルチャー受容のメカニズム—アニメ文化の広がりを通して」「シティ・ポップの逆輸入と Future Funk への発展」「日本産ゲームの海外受容—昔ながらのゲームの「今」など。この最後のプレゼンテーションは、日本のメーカーが牽引してきたイメージのある世界ゲーム市場での日本産ゲームの現状を知るといった目的のもと、分析の手法を明示した上で、日本産ゲームの人気の理由と世界のゲームトレンドの溝を見出し、今後勝つために必要な要素まで考察した、特に優れた発表の一つでした(半年ほど経って、本人から、海外における日本産ゲームの評判を探るのに調査したレビュー・サイトを明記しなかったことが反省点だったと聞きました。終了後も熱心に振り返ってくれていたようです)。

とはいえ、基本的には、持ち寄られたテーマを共有して楽しむことを大切にしています。7月に行いますので、冷たい飲み物を片手に、といったところです。私自身プレゼンテーションは苦手ですが、学部時代に、香港について英語で発表して褒めてもらえたことがありました。いまフランス語が第一外国語である私がそれほど英語にも抵抗を感じずに済んでいるのは、この記憶に支えられ

ているところが大きいと思います。そうした成功体験を本科目の受講生にも得てもらうため、互いの良かった点を指摘し、敬意を持って質問し合うことにしています。

コロナ禍を受けた実施方法

ところが、コロナ禍によってこれらが行えなくなりました。大学に寄せられる厳しい意見も目の当たりにし、この大学に入らなければよかったと思わせることが絶対にならないように、との思いで、力業で乗り切りました。2021年には全受講生が Moodle を使えるようになりましたが、2020年は NextCloud を介して講義資料の授受を行うにあたり、京都三大学教養教育研究・推進機構の方々には大変お世話になりました。改めて感謝申し上げます。

幸い、例年使用しているプリント教材とパワーポイント資料があり、CD や DVD も YouTube にアップロードされていたので、オンデマンドに移行するのはそれほど大変ではありませんでした(ただし、技術も余裕もなかったため、荒削りな出来です)。一方、教員と受講生の双方向性、受講生同士の接点を維持するため、フィードバックを丁寧に行うことにしました。

評価の半分を占めるグループワークができない代わりに課題を出し、各回答の興味深い点にマーカーを引いたりコメントを付けたりして、全体に講評を配信しました。2020年は匿名で引用しましたが、2021年は各自で付けてもらったニックネーム(犬さん、村人Aさん、人間ロボットさんなど)を用いました。これによって、オンライン上でのプライバシーを守りつつも一定のアイデンティティが生まれ、ラジオのリスナーのように取り上げられるのを励みにして、対面時よりもよく考えられた回答やユニークな回答が送られてきま

した。

受講生によるプレゼンテーションはパワーポイントだけで行いました。回収したものを4回に亘って配信し、感想と質問一つの提出を必須としました。方法は例年と同等とは言えませんが、うまく作成されたものが多くありました。特に感心したのは、2020年の受講生による「言葉と文化」と題された発表です。この受講生は「海外にある日本語を知ればその国における日本文化がわかるのでは?」との疑問から、コロナ禍による閉塞感しかなかった当時、文通アプリを用いて海外の友人にアンケートを取り、フランスでは伝統文化が、中国では挨拶など実用的な言葉が、サブカルチャーや日本食はいずれの国でも、よく知られていることを導き出しました。

このようにして、対面時はその場で二、三、発表されるだけであった反応が、全受講生からたっぷり文字で寄せられるようになり、返答にも熱が入っていたようです。

コロナ禍に見舞われる中、受講生たちの遅しさを感じることも何度かありました。2020年のクラスでは、前期授業終了後に、台湾の留学生から個人的にメールを受け取り、〇〇のプレゼンテーションを行なった人と繋がりたい、コロナ禍によって日本人学生と知り合う機会がないから、と依頼を受けました。相手も喜んで受け入れてくれて、授業では互いの顔を見ることのなかった受講生同士が、その後に新たな関係を築いていくことを大変嬉しく思いました(この留学生からは今年の初めに、思いがけず新年の挨拶をもらいました。「台湾音楽におけるジャポニスム—歌姫に影響された台湾ポップス」と題し、「台湾語」によるJ-POPのカバーを紹介してくれた受講生です。台北で開催された展覧会を見に行き、授業を思い出してくれたこと、フランスの言語と文化

に惹かれてフランス留学を目指していることを知らせてくれました。オミクロン株の急拡大で再び先行き不透明になった年初に、励ましをくれた一通でした。

今後の課題

本科目はジャポニスムという異文化「受容」を扱っていますが、そのなかで近年の受講生は「文化の循環」に、より強い共感を抱いているように感じます。例えば、浮世絵を着想源の一つとして生み出されたアール・ヌーヴォーの画家アルフォンス・ミュシャの作品が、与謝野晶子『みだれ髪』の表紙絵に影響を与えて、日本に新たな文化をもたらした、などです。この傾向は、実際の授業を通して感得したことの一つでした。

また、プレゼンテーションでは、「ヨーロッパのIMARI」「能とジャポニスム」「茶道文化の普及」「海外における日本の刃物」といった伝統的なテーマを扱ったもの、「日本の建築とジャポニスム」「うま味、UMAMI」「映画のポスター、日本はダサイ?」「黄金比」など各自の専門分野の知見を盛り込んだものだけでなく、「EMOJI、日本が生んだコミュニケーションツール」「ガチャガチャでつながる日本と海外」「海外と食品サンプル」「ロータファッションと海外」といった、新しい切り口のものも増えてきました。

これらを考慮しながら、講義内容をアップデートしていきたいと思っています。「学びが今も私の中で生きています」というのは、先に挙げた留学生が送ってくれた胸に染み入る有り難い言葉ですが、2022年度も、そうした三大学教養教育共同化科目としての役目を果たしていければと思います。

(7) 読み比べであれ聞き比べであれ (科目名: 文芸創作論)

京都府立医科大学 特任教授
藤田 佳信

文芸創作論では、作品の読み比べをします。異なる作者の作品を複数、あるいは同じ作者の作品を2, 3比較します。その試みを推し進めると、比較文学の領域に入ることになりますが、本科目では深入りはしません。目的が違いますから。あくまでも最終課題のエッセイ創作をめざして、読み書きについて考え、創作の心得や態度・技法を習得するためです。

目的・目標がはっきりしていますから、受講者の人数は自然に限られ、熱心に課題に取り組んでくれています。

感想文やエッセイを書くために、まずは対象の文章を読み解さなければなりません。「観察」という基礎作業、受講生にはできるだけ細かく文面を観察してもらいます。「悉(つぶさ)に」という詞が似合う注意深い観察を目指します。くり返し読んで内容を理解し、その内容の見せ方に注目、あるいは文字面をにらんで表現・表記の特徴をメモしておくなど等。

文芸に「校訂」という基礎作業があります。人文科学‘Diplomatics’の分野で行われる読み比べで、西欧に古くからある古文書文献学の校訂です。日本の近代文芸なら一つの、同じ作品でも自筆原稿・初出紙誌・初版本・全集本・出版各社の文庫本などを比較検討し、字句の異同を調べます。細部へのこだわりと粘り強さが必要です。「悉に」とか「悉皆(しっかい)」という詞がぴったりの仕事です。読み比べといっても、いまの電子本スマホ読みとは対極というか、異次元の話ですね。

授業の課題ではもちろん、校訂の読み比べとは目標も違い、時間的な制約などもありますから、受講生に悉に観察するまでは求めません。それぐらいの心づもりで作業してほしいということです。

そんな観察の基礎作業が終わると続いて、起筆、

執筆にかかります。感想文・感想エッセイを書く。問題は、どこから筆を起すか、何から書き始めるか、整理されないままに書き留めたメモを眺め、熟考します。初めに書きつけるのは、終わりまで辿り着ける一文でなければなりません。どう展開するのか、何をメインにするのかも考えないと…
受講生は、実際どのように課題に挑んだのでしょうか。

昨年度にひき続きまた、オンライン授業です。一方通行、単調になりがちなZoom放送。講義のコンテンツとその見せ方を工夫しなければなりません。何か新しいこと、「変化」が必要です。あれこれ考えました。それでエッセイスト、あるいは文筆家としてご活躍中の落語家をお二人招いて、特別講義をしてもらう企画をしました。落語家は、笑福亭たま師匠と桂文也師匠です。

落語を口演してもらうのではありません。正式な非常勤講師として、文章論を展開して頂きました。お題(トピック)は、「落語家の視点で見る文章論」です。話芸と文芸の比較になります。

笑福亭たま師匠は京都大学経済学部を卒業し、そのまま落語界へ。数々の賞を受け、四十代のいま、大いに活躍されています。エッセイストの仕事では、中日新聞カルチャー欄の「エンタ目」シリーズで、元気いっぱい、現代的センスを生かしたエッセイを連載されていました。

一方、桂文也師匠は、上方落語協会の理事もされる大ベテランです。中日新聞連載のエッセイ「桂文也のおきらくゴロく」は優に300回を超え、独走連載中です。すでに12, 3年は続いているとか。世間話というか、落語の登場人物が放つような、辛口の時事放談もあり、とにかく師匠の声が聞こえてきそうなほど紙面は賑やかです。テンポが良くて、詞の並べ方がリズムカル、句読点の使

い方も自由自在で。

両師匠が紙面で見せるのは文字、書き言葉です。それがお客の前で、演じているかのように聞こえるのも不思議です。お二人の文章は明らかに、読者に向けて書かれたものです。プロの書き手ですから、当たり前のように聞こえるかも知れませんが。その点ですね、わたしが受講生に意識してほしいのは。読者に向かい、自分の独特な声を聞かせてほしいです。

講義はそれぞれ60分ほど。(あとの30分は、質疑応答にとっておきます。) たま師匠のタイトルは「落語家が提案するエッセイ論」、文也師匠は「落語的文章論—ごまめのハギシリ」です。事前学習の課題は、どちらも落語の聞き比べ。桂米朝師匠の「壺算(つぼざん)」とたま師匠の「壺算」、あるいは上方の「時うどん」と江戸の「時そば」と。ほとんどの受講生にとっては、初めての経験のようでした。ある受講生の感想文は、以下のように始まります。「私は今まで落語を見たり聞いたりしたことはほとんどなかった。そのため、落語を聴いたときにどのような感想を抱くべきなのか、また同じタイトルでも別の人が話されているものを聞き比べたとき、どこに注目すべきなのかもわからない」。手探りですね。

読み比べであれ聞き比べであれ、「比較」は非常に有効な学習法です。受講生は言わなくても細かい観察をし、ものを考える(分析する)ようになります。実際、提出された感想文には、「何度も聴いている」とか「何度も再生するうちに」、あるいは「調べながら何回か聴いて」という表現が頻出します。「うんざりするほど聴いたので…」というものもありました。あるいは、静止画像の声だけの落語と動画ものを比較しています。

そして、感想文あるいは感想エッセイを書く。

大変な作業です、観察が細かくなればなるほど。プロット(構想)を練り、思いを整理整頓しながら、文字を丁寧に綴ってゆきます。読者に分かりやすく工夫を凝らしながら。ひとによっては、その緊張に耐えられないかも知れませんね。

多くの受講生が事前学習の課題を提出し、師匠たちにも目を通してもらいました。そんな面倒な作業ではありますが、みなさん進んで課題に挑み、書き上げたのですから、大いに自信をもって良いのではないのでしょうか。

当日、事務局から女性お二人がZoom放送をサポートしてくださり、ライブ感も一層高まりました。受講生の取り組みを感想文で読むと、多種多様な声が聞こえて、当初の目標は達成できたのかな、と思っています。

(桂文也・笑福亭たま両師匠への非常勤講師委嘱は京都府立医科大学にて、教育委員会・教授会・教育研究評議会の審議を経て承認されました。関係各位に厚く御礼申し上げます。また本年度オンライン授業では、医大事務局の保田令子・井本育子両氏に大変お世話になりました。記して感謝の意を表したいと思います。)

令和3年度 京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員会 委員名簿

令和3年4月

大学名	京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員会									
	担当副学長		リベラルアーツセンター		教育IRセンター		規約第4条第2項による者			
	職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名
京都工芸繊維大学	理事・副学長	吉本 昌広	基盤科学系 教授	朝田 衛	センター長 電気電子工学系 教授	萩原 亮				
京都府立医科大学	副学長(学生部長)	橋本 直哉	生物学 教授	小野 勝彦	生命基礎数理学 教授	長崎 生光	看護学科長	吾妻 知美		
京都府立大学	運営委員長 副学長(学生部長)	川勝 健志	センター長 文学部歴史学科 教授	岡本 隆司	公共政策学部 公共政策学科 准教授	秦 正樹	教養教育 センター長	窪田 好男	教務部長	長島 啓子
京都三大学教養 教育研究・推進機構							京都府公立 大学法人 三大学連携 担当課長	池田 英孝		

会議の審議状況

□学長懇談会 審議状況

開催日時	開催場所	審議事項
令和3年 4月30日(金) 午前9時30分 ～午前11時00分	教養教育共同化施設 「稻盛記念会館」 2階 会議室	【協議・報告等】 三大学共同化科目運営開始後7年目を迎えて必要とされる、各大学の 現将来構想を踏まえた三大学共同化科目の在り方に係る意見交換
令和3年 7月9日(金) 午前10時00分 ～午前11時20分	京都府立京都学・歴彩館 1階 小ホール	【協議・報告等】 (1) 第1回学長懇談会で提起された課題について (2) 三大学共同化提供科目の課題について (3) 三大学共同化提供科目の検討に係る今後の進め方について

□ワーキンググループ 審議状況

開催日時	開催場所	審議事項
令和3年 10月13日(水) 午後7時00分 ～午後8時20分	教養教育共同化施設 「稻盛記念会館」 2階 会議室	【協議・報告等】 (1) 座長の決定について (2) 開催スケジュール及び学長会議への報告時期等について (3) 各大学の三大学共同化科目に求めること及び各大学個別事情等の 共有について (4) ワーキンググループ会議での協議すべき事項及び論点の共有につ いて
令和3年 12月2日(木) 午後2時00分 ～午後3時20分	教養教育共同化施設 「稻盛記念会館」 2階 会議室	【協議・報告等】 (1) 論点整理の方針について (2) 将来構想の検討方針について (3) 各大学の具体的な制度改変要請について
令和4年 2月1日(火) 午後6時15分 ～午後7時15分	教養教育共同化施設 「稻盛記念会館」 2階 会議室	【協議・報告等】 (1) クォーター制度導入案について
令和4年 3月22日(火) 午後6時00分 ～午後7時30分	教養教育共同化施設 「稻盛記念会館」 2階 会議室	【協議・報告等】 (1) クォーター制度導入モデルに係る各大学の協議等の状況について (2) 学長会議報告に向けた協議予定等について

□ 副学長会議 審議状況

開催日時	開催場所	審議事項
令和3年 9月8日(火) 午後4時10分 ～午後5時25分	教養教育共同化施設 「稲盛記念会館」 2階 会議室	【協議・報告等】 (1) 令和4年度 Moodle 提供要請等について (2) 第2回運営委員会予定議案の調整について

□ 運営委員会 審議状況

開催日時	開催場所	審議事項
令和3年 6月22日(火) 午後4時30分 ～午後6時00分	教養教育共同化施設 「稲盛記念会館」 2階 会議室	【協議・報告等】 (1) 令和3年度の機構人事について (2) 令和3年度の取組等について (3) 令和3年度前期 教養教育共同化授業の履修登録者の状況等について (4) 前期試験取扱通知(案)について (5) 後期講義基本方針等(案)について (6) 教育IRセンターの活動について (7) 三大学学長懇談会開催結果について (8) 令和4年度以降のe-ラーニングシステムのMoodle利用について
令和3年 9月29日(水) 午後3時00分 ～午後4時00分	教養教育共同化施設 「稲盛記念会館」 2階 会議室	【協議・報告等】 (1) 規約改正に係る報告について (2) 教育IRセンター及びリベラルアーツセンターからの報告について (3) 令和4年度共同化科目について (4) 令和4年度教養教育単位互換科目の対応等について (5) 令和4年度学年暦について (6) 令和4年度LMS等の対応について (7) 令和4年度事業計画及び予算について
令和4年 1月14日(金) 午後2時00分 ～午後3時30分	教養教育共同化施設 「稲盛記念会館」 2階 会議室	【協議・報告等】 (1) 令和3年度後期教養教育共同化授業の履修登録者の状況について (2) 担当者会議の開催概要について (3) 学生自主企画グループ等の活動等について (4) 令和4年度の開講方針について (5) ワーキンググループ会議の開催状況等について (6) 令和4年度学年暦について (7) 令和4年度共同化科目について (8) 令和4年度LMS等の覚書改定(期間延長)について (9) 令和4年度事業計画及び予算について (10) 令和3年度後期試験の対応について (11) 令和3年度報告書の作成方針について
令和4年 3月16日(水) 午後4時00分 ～午後5時30分	教養教育共同化施設 「稲盛記念会館」 2階 会議室	【協議・報告等】 (1) 令和4年度講義方針(対面・非対面)等について (2) 令和4年度共同化科目について (3) 令和4年度予算(案)、事業計画(案)について (4) 令和4年度講義等取扱通知について (5) ワーキンググループ会議の開催状況等について

□ 共同化科目担当者会議

開催日時	開催場所	審議事項
令和3年 12月13日(月) 午後6時00分 ～午後8時00分	オンライン	【協議・報告等】 (1) 教育IRセンターからの報告「オンライン講義に対する受講生の声」 (2) 学生交流からみた教養教育カリキュラム (3) 「モノ」に関わるゼミナールにおけるオンライン授業の難しさと克服策 (4) オンライン授業から学べたこと (5) 総合意見交換

京都三大学教養教育研究・推進機構「授業アンケート（2021）」

このアンケートは、京都三大学教養教育共同化科目を受講する皆さんの意見・感想を今後の科目のあり方や実施方法の改善に活かすために行うもので、成績評価には一切関係しませんので、率直に答えてください。なお、集計結果の活用の際には、個人情報保護の観点から細心の注意を払います。

科目名

※該当する番号ひとつに○をしてください。

I あなたの所属は、次のうちのどれですか。

- 京都府立大学 (1.文学部, 2.公共政策学部, 3.生命環境学部)
 京都工芸繊維大学 (4.応用生物学課程, 5.応用化学課程, 6.電子システム工学課程,
 7.情報工学課程, 8.機械工学課程, 9.デザイン・建築学課程, 10.その他)
 京都府立医科大学 (8.医学科, 9.看護学科)
 10.その他 ()

II 学年をお答えください。

1. 1回生 2. 2回生 3. 3回生 4. 4回生 5. その他

III この科目の出席状況をお答えください。

4. ほぼ全て出席した(12回以上) 3. かなり出席した(9~11回)
 2. あまり出席しなかった(5~8回) 1. ほとんど出席しなかった(4回以下)

IV この科目について、1回あたり平均してどのくらいの授業時間外学習(予習・復習・情報収集・レポート作成等)をしていますか。

4. 120分以上 3. 60分以上 2. 30分以上 1. 30分未満

V この科目を受講してどのような感想を持ちましたか。

次の各項目に5段階で答えてください。

	5 強く 思う	4 やや 思う	3 どちら とも 言 え な い	2 あ ま り 思 わ な い	1 全 く 思 わ な い
(1) この科目や関連する分野特有の視点や手法を学んだ	5	4	3	2	1
(2) この科目や関連する分野の基礎的知識を修得した	5	4	3	2	1
(3) 世界の人々の多様な生き方に触れた	5	4	3	2	1
(4) 自らの生き方を考え、高い倫理観を培った	5	4	3	2	1
(5) 現代社会が抱える問題への関心が高まった	5	4	3	2	1
(6) 文献・資料などを検索し、読解する力が高まった	5	4	3	2	1
(7) レポートを書く力が高まった	5	4	3	2	1
(8) 論理的に思考する力が高まった	5	4	3	2	1
(9) 受講生や教員との議論を経験できた	5	4	3	2	1
(10) 自大学では学べない領域を学んだという実感があつた	5	4	3	2	1
(11) 教員との双方向のやりとりがあり、授業に参加しているという実感があつた	5	4	3	2	1
(12) 課題や小テストなどのため、講義時間外でこの科目に充てる時間が多かった	5	4	3	2	1
(13) 成績評価の方法や基準が明らかにされていた	5	4	3	2	1
(14) 授業内容に触発されて、関連分野をより深く学びたいと思った	5	4	3	2	1

VI 以下のIとIIに関するご意見をお寄せください。(回答は任意です)

- I 今回実施されたオンラインの授業の形式は有効に機能したと思いますか。関する意見や、今後に向けての提案などを、自由に記入してください。

.....

- II この科目の内容について、以上までの回答に含まれない意見などがあれば、自由に記入してください。

.....

編集
発行



京都三大学
教養教育研究・推進機構
Institute of Liberal Arts and Sciences

所在地：〒606-0823 京都府京都市左京区下鴨半木町1番5
教養教育共同化施設「稲盛記念会館」内

T E L : 075-703-4925

F A X : 075-703-4979

H P : <http://kyoto3univ.jp/>

発行日：令和4年3月

デザイン：株式会社シマプリ